

275

78



* 0041560000 *

0041560-000

275-78

作法と人格教育

建部遯吾・著

丁酉出版社

昭和6

AHB

401



作法
人格教育
林部遊老著



275-78

作 法 人 格 教 育 序 言

3

序 言

日本人は賢くないまでも伶俐なる人間どもである。然るに現代の日本は何といふ穿き違ひだらけの社會であらう。日本の丁髷時代は、西洋も一種の丁髷時代であつた。随分、男も一種の結髪をするものさへあつたのである。日本だけが丁髷時代から猛然として維新の新時代に進んだ、と速了的に自惚れてはいけない。第十九世紀から第二十世紀に入るに於いて、西洋も亦猛然として新時代に進み、殊に社會生活の根本思想に於いて、翻然としてその丁髷をかなぐり棄てたのである。

個人本位の思想、個人的自由平等の思想、マルクシズム等は固より、アナルキズム、インタルナシヨナリズム等の反動思想は、皆

是れ西洋の、今や泥塗に委せられ了れる丁髻思想であるのである。

事實に目を蔽ふは臆病者の事、胸に一物あるものは臆病になる。其の眸子を觀ば、人焉んぞ瘦さんやと、東洋二千年前の或る大賢が申して居る。眸子を人に見せ、眸子で事實に直面する、それが出來ずに初期の羅馬の耶蘇教徒もどきに、人に隠れて墓穴の中で秘密會合などは、餘り客で、日本人には逆も出來ぬ藝當である。

不幸にして、我が維新以來、遺憾ながら今日に至るまでの教育乃至教授材料たる各般の學術どもは、右の丁髻西洋のそれらを、或は若干の潤飾を加へ、甚しきは其儘に受け容れたものであつた。西洋といへば丁髻文明と思ふのは、西洋其者に取つても餘

りに氣の毒なる沙汰である。個人主義の倫理學、個人主義の教育學、個人主義の哲學、宗教、個人主義の法制經濟、甚だしきは個人主義の社會學（！）など、悲惨を通り越して滑稽に陥るは、丁髻西洋の丁髻模倣の猿芝居である。

西洋も晩蔭ながら覺醒した。否、覺醒が餘りに後れたゆゑ、天が執達吏を遣したのが世界戰亂である。兎も角目を擦りながら、顔も洗はずに元氣の好い所を見せたのが、ムツンリーニ、ケマル・パシヤ、ブリアン、故人ではローズヴェルトなど、年の若いちやきく連である。

さて日本人もこの邊で善心に立ち返る事とし、何からさきに手を着けるがよいか。一人前の手腕力量があるなら同時に百くらの仕事も出來るが、それは半醒半醉の人間どもには無理

な注文、そこで一寸ちつこ小手調てしらべとして、作法あたりが新たに興る運命の國での新たに興るべき教育事業に相當であらう。この小著はその趣旨で書かれたものである。書き手の僕も亦近い過日、こんな駄句をならべた、人間どもの中の一人である。

流水高山天地真。 半生醒醉臥雲身。

梅飛櫻發一窓外、 三月昭和辛未春。

是歲八月六日、北越横雲橋畔、
高橋修竹鄭會、北窓の下にて、

建部 遜 吾 識 ず。

目次

第一 現代人の心理

世は進んだ	三
幸福の重荷	五
白痴の愛嬌	七
情ない状態	二一
皿鉢が飛ぶ	二三
おたふく妄想	二六
自由奔放と合理探究	一九
道は近きに在り	二三

第二

禮儀の藥性

二六—四六

勅語失念

二四

運轉手なしに走る自動車

二六

シグナル見ずの機關手

二八

窮狀の救済

三〇

禮儀の性質種類

三三

慣習から道德法制まで

三六

道德の諸問題

三七

禮儀の職能

四二

繁文縟禮の由來と限度

四四

第三

最大禮

四七—六五

第四

神社尊尙

六六—八四

神社の本質

六六

祭神の種類

七〇

神社の形式格式

七三

變的神社

七五

第五

家禮

迷ひの種……………七

淫祠……………九

祭典行事……………八

家の裡に行はるる禮儀……………八五

現實の人々の中の禮儀……………八五

現實ならぬ人に對する禮儀……………八七

神佛に對する禮儀……………九〇

食事の禮儀……………九二

坐作進退……………九五

出入起居……………九六

第六

交遊

物の扱ひ……………九八

元服のこと……………九九

婚禮のこと……………一〇三

喪禮のこと……………一〇四

家祭のこと……………一〇六

禮儀と社會診斷……………一〇七

訪問面會……………一〇九

辭令應對……………一一一

贈答……………一一三

慶弔……………一一五

第七 作法

饗宴……………二六

作法の原理……………一〇一—一〇七

平常心是れ糞土……………一〇三

食事と食相……………一〇六

宴會の作法及開催……………一〇七

餐會・茶話會・夜會……………一〇〇

作法の基礎教育……………一〇四

汽車作法……………一〇七

道路作法……………一〇三

演藝會作法……………一〇六

第八 結び

結び……………一〇八—一〇九

文政當局の作法尊重……………一〇八

又々勅語大失念……………一〇二

女學校の寄宿舎……………一〇四

寢相……………一〇五

爾の下駄を穿き且歩め……………一〇七

序 言

卷首

建部遜吾著述目錄

卷尾

作法と人格教育

萬國社會學士院正會員
米國政治學博士
文藝學士

建部遜吾著



現代人の心理

世は進んだ

世は進んだ

富は増した、人も殖えた。世の中は日、一日と賑やかになりつつある。

建物は高く天を摩し、海上には大なる移動式ホテルが浮び、鐵道は網をなし、更に自動車が汽車を追ひ越し、飛行機、航空船は縦横に天を翔り、海も、陸も、乃至空までもが日、一日と縮まりつつある。

新聞紙は驚くべく発行高を増し、今や百萬以下では一と廉の

營業も出來兼ねる状勢。其のくせ毎號の欄の數字數も殆ど際限なく増し行く有様、蟲眼鏡なしには新聞の讀めぬ、といふ時代の來るのも餘り遠くはあるまいと期せらるる。雜誌の發行も新聞と競争で、一號の數量が積んで富士山に何倍といふ高さに及ぶ。新刊書籍は、たゞに一圓本のみといはず、到る處に洪水の氾濫を來して居る。

一寸、町へ出ると、耳をえぐるジャズ、眼を爛らす活動の看板、遠近と上下とを顛倒せる新式の畫風に、エロ、グロの猛烈さを以て人の心に突撃する。騒音防止などでは絶望的なる街頭の亂脈、それにふさはしき人々の行きかひ、更にそれにふさはしき婦人の装ひ。悪魔の娘が人間に落ちたか、仁木彈正を女にしたやうな、兇惡無比の眼瞼まぶたのくまどり、只今人肉をなままで賞味しました

と、言はぬばかりの口唇の眞紅。外道の行列を印度で見るやう、これでは此の國もやがては印度のお隣か、と、飛んだ聯想も出で來べし。

幸福の重荷

現代に對する現代人の抱負、矜持、所謂ブライド、自惚、自分免許はすさまじい。併しそれは腹の中、から出て來たものであるか、或は案外に鼻の先に附着せる程度のものでありはせぬか、「なぐるぞつ」といふものになぐるものはない。遠吠する犬は臆病犬である。人は絶望に瀕すると大言壯語を連發する。

現代は先代の成績品である。先代の人々は、此世の幸福を望んで熱心なる努力を續けた。努力は報いられた。彼等は幸福

を贏ち得た。幸福は幸福を生んだ。社會進化の六大根本理法の第一則、加、速、度、の理法は忽ち茲にその現金なる的面なる支配を實現した。先代から現代になると、幸福の洪水はやがて現代人を蕩流せでは止まざるけは、ひを示して來た。現代人は今や幸福の壓迫に呻吟すべく行く手を急ぎつゝあるのである。

生活に苦むものは生活の安易を思ふ。苦むものに取つて安易は幸福である。安易なるものに取つては安易は必ずしも幸福でない。安易も亦一つの負擔である。藥は病人に取つては救ひである。併し病の去つた後には負擔であり、餘計なものであり、甚だしきは毒である。それ／＼の先代は、餘りに多くの幸福的負擔を現代の世の中に向つて遺して呉れて居るのである。貧乏も苦しい、富裕も樂でない。借金の相續は苦しい。億萬

の遺産を相續するは更に苦しい。

白痴の愛嬌

斯の苦みに悶きつゝあるのが現代人である。現代人心理に、先づ眼につくは矛盾、煩悶である。

現代人ほど煩悶の好きな連中はない。併し煩悶は何も嗜き好んでするのではない。嗜き好んでの煩悶ならば煩悶せずとも済む。煩悶の底には矛盾が棲む、矛盾あるが故に煩悶するのである。矛盾の最も悲惨なるは、主觀と客觀との間に於ける矛盾である。現代人の煩悶のどん底に潜む矛盾のおもなるものを列記すれば、

第一は宗教の影の薄くなり來つた所から生ずる矛盾である。

絶對に有り難いものとして教へられたる、有り難かるべき筈の宗教は、一向に有り難からぬ現實曝露へと、徐々ながら確かなる有り難からぬ足取りを以て、今や進み行き下り行きつゝあるのである。

第二は哲理方面の矛盾である。「今や世の中は餘りに物質的となつて居る、物質文明獨り進んで、精神文明之に伴はず……」と歎息することが當世哲學者連のきまり文句である。さりとして鐵道建設を中止せよといふの勇氣もなく、矢ッ張り俗人同様汽車にも乗り電話も掛けねばならず、と言つて哲學では所謂精神文明の建設や上進は思ひも寄らず。——其處に大なる矛盾煩悶が巢くうて居るのである。

編愛の痴白

第三は科學應用生活の利害相殺に於ける矛盾である。明治

の半ば頃の東京では、電車もなかつた代りに、教員や役人や會社員は皆五分乃至十五分位の徒歩で出勤した。今は便利な電車が出來て勤め人は郊外から通ふ、近くて三十分、多くは一時間内外を費す。何が便利か。三越へ出掛けては、買物をする外に、屋上庭園に散歩し、食堂に行き、甚だしきは餘興まで觀せらるゝ、其の娛樂を攝る其事が既に文明生活の一つの重き心理的負擔である。

第四は個人國家國際のトリレンマである。個人と國家とは所謂個人の自覺で一寸ヂレンマに陥つた。歐西の十九世紀思想にはこれが烈しかつたが、世界戰亂を木の頭で晩蒔きながら聊か開けかけて來た。我國では忠孝の明教で、此點はさほどでなかつたが、近頃歐西の強國共の竊名宣傳、國際主義といふに目つ

ぶしを打たれて、國家本位か國際本位かに迷ひ出し、四苦八苦の體たらくを演出しつゝある。

第五は新舊の迷ひと争ひとである。自分の氣に入るものを新と名づけ、氣に入らぬものを舊と名づくる。午前九時は舊で午後三時が新、それは何人も動かす可からず違ふ可からざる客觀的事實であるのに、さりとては餘りに白々しい白痴的言動ではないか。日本の國體の如きは二千五百年來の「夢未だ醒めず」と白痴連中は申すであらう。「平均七十二歳の樞密院老人連に、參政權を欲求する二十歳學生の心理が判るものか」といふ、七十二歳の人間で二十歳を経て來て居らぬものはないが、七十二歳を通り過ぎてから二十歳にまごついて居るものはない。現代人の矛盾が落語式珍滑稽にまで陥つて居るのは愛嬌である。

情ない状態

現代人心理で、次に目につくは神經の疲勞乃至衰弱である。

現代の精神生活は如何にも資本の、かゝる精神生活である。

智的活動には二十年の學校生活が要り、情的生活には活動寫眞、觀劇、音樂、繪葉書、帝展、漫畫、舞踏、カフェエ、銀ブラ、戀愛が要り、意思體育生活にはスポーツ、應援、入場券争奪、スキー、リュックサック、登山、行衛不明、坐禪、禪學が要る。東京の電車では随分多數の居睡り連中が見受けらるゝ。電車にも時間は要る、騒音に攻められ、體力の疲勞が伴ふ。住宅より最寄の停留場まで、電車を降りてから學校會社又は役所まで、それ丈の距離は何等短縮されな

い、朝夕の往復に片道三十分掛るなら、其人の壽命は二十四ヶ年

に付て一ヶ年縮められて居るのである。

現代人は斯様に神経疲勞を來しつゝあるので、色々の方面に其の症候が現れて居る。

餘裕のない事が其の一つ。彼等には悠たりと寛いだ所がない。

性急なる事が其の二つ。彼等の多數にはうかさかせる違々焉たる心狀がまざまざと讀まるゝ。大都會の婦人達の電車中の談話の身振りを脇から見ると、十分二十分で頸の運轉から腦病が起らぬかと心配される。

精力減乏、能率低下が其の三つ。學生生活のみならず、工場労働者乃至兵卒、屬官等についても、かなり屢々且高き程度に見出される。

快樂追求が其の四つ。神経の疲勞せる者は、刺戟に對する感受性が必然に衰へて居るから、更に強烈なる刺戟を與へなければ一通りの快樂を感せぬ、それは現代の快樂刺戟が、毒々しきまでに濃厚の色彩を發揮して居る事實に顯著である。麥酒から酒、酒からウイスキー、悪いと知りつゝ止められぬといふ状態、快樂追求が一轉して、快樂耽溺に進む、それである。

勿論現代人が悉く此程度まで猛烈に神経衰弱に陥つて居るではないか、過去人に比べて現代人は平均此の傾向が頗る強い、洵に情ない状態に在るのである。

血鉢が飛ぶ

さて更に眼につく現代人心理の特徵は破壊病である。

小兒に於いて極めて顯著である通り、三ッ兒のたましひ百まで、人間は建設も好み、又破壊も好む。如何にも矛盾のやうであるが、實は人間の好む所は、心理的には、建設でもなければ破壊でもない、人間の心理的欲求は實は活動である。就中建設活動は相當氣長なる活動、隨て稀薄なる活動であるが、破壊活動は氣短かなる活動、隨て濃厚なる活動である。兒童が木片で汽車を作るに十分かゝるが、壊すのは一秒で済む。羅馬帝國の建つのは七百年かゝり、滅ぶるのは手間暇いらぬ。建設活動に比べて破壊活動は、時間が六百分の一であるだけ、濃厚の程度は六百倍である。

ピストルに彈丸を込めると打つて見たくなり、刀を買ふと試し斬りがしたくなり、柔道初段になると湯屋で喧嘩して見たく

なる。近代の科學及應用の發達は、利用厚生、の方面にも勿論貢獻したが、戦争、破壊の方面にも大なる寄與をして居る。戦争の直後には「平和論」が流行するが、平和が続くと人心が倦怠する。湯屋の喧嘩、九段坂の試し斬りの大きいのが先般の世界戦亂である。

飽きが來ると内閣更迭が論せらるゝ、内閣は破壊される。飽きが來ると政黨が分裂する、黨界に分合作用が起る。飽きの來ることの早い晚いは、神經疲勞の深淺による、現代人は殊に物飽きすることが早い。酒に酔ひしれると皿鉢が飛ぶ。破壊すまじきものを破壊する。社會生活を破壊し、國體を破壊し、國家を破壊し、自分の居る處をも錯覺し、細君をハラハラさせながら「吾が家の何々樓」どこかの青樓を口走る。「吾等の祖國ソグアイエ

ト・ロシアなど、皆是れ病的心理に固有にして且有りふれた症候である。

おたふく妄想

更に現代人に著きは模倣、附和、雷同、迎合である。

現代人心理は、或る點に於いて極めて小伶俐しく發達して居るが、斯様に矛盾煩悶から更に神經疲勞を來たし、又破壊病といふ症候を呈するに至れる其の状態に於いて、心意生活、就中思想生活の退化、逆轉、一口に言へば原始化を致す。

思想生活の原始化の社會生活に於ける、最も著しき特色的の現れは模倣である。原始人の更に原始的なる動物は猿である、猿は模倣、倣宗の日の下開山である。人には老少あり、嬰兒は足で

物を掴み、小兒は模倣宗の長老で、婦人も餘程しつかりせぬと沙彌小僧くらゐにはなりかねない。警察が干涉せぬ限りせいせい脚線美を發揮したい、と思はぬ淑女は尊敬に値する。ウィルソン、ロイド、ジョージから、甚しきはダグ、サンガアまで、何か本尊を設けて、虎の威を藉る、狐とならねば氣の濟めぬ連中は、先づ以て原始山模倣寺の猿猴和尚の弟子共である。

附和、雷同は、模倣連の群居に於ける、複數心から起る所の、集合心理的必至の現象である。それにやゝ尤もらしい哲學めかした題目を附加したのが「大勢順應」で、更に一枚の上皮を剥いで正態を曝露すると、識者から憫笑的に命名せられたる「大勢迎合」である。

世界戦亂は、有史以來の尤も大規模なる、尤も慘烈なる戦争と

して、直接これに参入し捲き込まれたると否とによらず、現代世界の人心に絶大なる驚愕を喚び起した。「驚愕は哲學の父なり」と古代希臘の哲學者も申した。驚愕は幼童に精神衝撃を與へ、精神病の若干の原因を提供する。驚愕に利害關係を伴ふと恐怖となる、恐怖は宗教の母なり」と古來言ひ傳ふ。世界戦亂は驚愕と恐怖との深酷と大規模とを以て、現代人の常態心理を攪亂し、世界的の況さに於ける變態心理の大流行、大席卷、大汎濫を來した。戦後年々のスペイン風、悪性感胃の世界的流行は人皆これを觀た。併し右の因縁に坐する悪性變態心理、人心の其の恒を失うた大變調大動搖は、悪性感胃にも増して世界の生活を糜爛した、それに氣がつき、それを觀取し、それを以て天下に警告したのは唯極少數の識者のみであつた。

變態心理は軽度の精神病的現象である。茲に現代人心には、幾多の妄想を生じ來つた。平和永續妄想、孤立恐怖妄想、迎合妥協妄想、軍備撤廢妄想、統制廢棄妄想、鼻を潰して眼口を埋める三平二滿妄想、鶴の脛の長きを採つて鴨の脚の短きを補ふ採長補短妄想、社會改良妄想、男性女性化、女性男性化妄想、愛新妄想、憎新妄想、等、數ふるに遑あらざる妄想が、憫むべき現代人の疲れたる胸の裡に込み上げて來た。世の中に物のあはれを止めたるは、先覺めかした自稱新人、共の遺したる社會的精神病的現象の病床記録である。彼等は一系列に黎明と黄昏との見境をすらも喪失した。

現代人心理を其の常的靜態に於いて觀察するに當つて見逃すべからざる要點は、殊に二點に集約せらるる。

第一は自由奔放の思想傾向である。第十九世紀は個人本位の半開時代であつた。物質本位の未開時代より漸く脱化進轉して、法律政治生活には權利思想、人權思想、倫理道德生活には人格思想、これの發生發達が此の半開時代の是非共成し遂げねばならぬ大任であつた。而して成し遂げられた。最早第十九世紀式個人本位思想は、蟬のもぬけたる殻である。今なほ殻を愛玩して蟬と認むる連中に乏しからざるは、世界戰亂の重要な因由の一つであつた。世界戰亂にもまだ眼の醒めぬ連中は、人類の屑である。

兎も角も人權人格の思想は人類の必然修得せねばならぬ進

程の成績である。其の常住茶飯座臥進退に於ける現れが即ち自由奔放の氣分である。自由奔放の氣分ありてこそ人間の實現的功率は大に發達暢開が出来る。併しこの氣分は時計のゼンマイのやうなもの、秒々刻々に之を制動する仕掛がなければ時計は忽ち無政府状態の滅茶々に陥る。自由奔放の氣分の盛なる現代は、殊に各人の心内に於ける制動機、ブレーキの必要を感じるの切なる時代である。

第二は合理的探究の思想傾向である。科學及び其應用の發達は天地の大に比べてはまだ言ふに足らぬ程度であり、範圍であるとは申しながら、近時著しく人間の頭腦、殊に論理的機能に刺戟を與へた。積もり／＼ての其の成績が合理的探究の氣分となり來つたのである。殊に半世紀以來の學校教育は、先づ此

氣運に乗じて舟筏を行るの前驅として、夙に來らんとする時代の活躍者に此の習氣を植ゑ付けた。現代人は、その精神の健實なる限り、全頭腦の渾一を欲求する。左腦に甲は乙なりと認め、右腦に甲は乙ならずと認めしめらるゝは、彼等の耐へ難しとする所である。矛盾に對する煩悶が、彼等に於いて殊に苦痛の大なる所以である。

現代人、殊に眞率にして偽らざる現代兒童は、自由奔放を露骨に要求するの青年たる前に、何事に對しても「何故？」の説明を求むるの少年となる。「何故？」の問に對して「其事は言論を超越する」と答ふれば、更に「其事は何故に言論を超越するか」の疑問を繼出する。この疑問に解決と案定とを與ふるの實力なきものは、現代の青少年に對する教育者たるの資格なきものである。

「先生、國體を尊重せよとの御言葉は、幾重にも服膺致します。併し先生、國體は何故に尊重せざるべからざるものでありますかと生徒は質問する。「國體は言論を超越する」といふが若しも先生の答であるならば、一に左右を顧みて他を言ふの過^{あやまち}、二に此の重要にして而も今日の學問で既に完全に答へ得る所の學理に通曉せざるの過、此二重の罪過を此先生は負うて居るのである。

道は近きに在り

今日の教育者には洵に同情に堪へぬことが多い。「道は近きに在り、而して之を遠きに求む」これは身を修むる上の古人の箴言であるが、維新以來の教育の惰性、今尙近きに在る教育の基準を遺れて、之を歐西、而も模糊たる烟靄の彼方に滅没せる第十九

世紀半、開式教育、修身に憧憬を寄するとは何事ぞや。併し教育者は教育行政者に縛られ、教育行政者は無識なる學者に訓へられ、之に問ふこと愈々高くして教を受くること益々陋、これが遺憾ながら今日の實況である。この種の實況は、程度にこそ大なる深淺はあれ、我國以外にも全然迹方もないとは言はれぬ所の、現代世界、到る處の不祥事である。

人心の倦怠し、民族の墮廢し、文明の頹廢する處、其處には優秀、深奥、堅確、大規模なる學術の起ることは期せられぬ。世界を通じて、現二十世紀、學術上、何程の目ざましき進運の開拓が舉稱せられ得るか。

勅語失念

道は近き在り

此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス
教育の淵源は遠きに求むるを要せず、國體の精華が取りも直さず、教育の淵源である。

自覺せる國々は、いづれも申し合せたるやうに國民教育の根本方針を自國國體の精華に眞くに到來しつゝある。獨逸、憲法第一四二條「國體性格の涵養」然り。米國の二大標語「丹心報國」及び米國國體尊重然り。ケマル、バシヤに導かるゝ土耳其然り。ムツソリイニに統率せらるゝ伊太利然り。

遺れたる大本に歸れ、而して爾の違々焉たる心忪は、平靜に落ち付かん。心廣く、體胖かに、而して榮光ある活動の天地は、爾の眼の前に開かれん。

第二 禮儀の藥性

運轉手なしに走る自動車

現代人一般の心理的傾向として、矛盾煩悶、神經疲勞、驚愕恐怖、附和雷同、大勢迎合、自由奔放、合理欲求、さまざまの特殊なる現れが顯著である。其上に、現代社會に著しいことは、所謂大衆の擡頭である。

大衆は、大衆で長所がある、併し、上流は上流で矢張り若干の長所を有たぬでない。擡頭するだけ擡頭して仕舞ひ、落ちつく處に落ちついて仕舞へば、それで平靜に歸するが、今盛に擡頭、最中である所の大衆は、猪の如く向ふ見ずに突進する。そこで幾十

百代の進化を経て漸うに到達せる秩序、文明生活にも一時何等の價値を認めぬといふ所まで盲進する。凡そ統計曲線の尤もふくるゝ所は中程にある。點數の順序に一つの級の生徒の數を並べると、中等の成績が一番多數であり、優等生の數の少きは勿論、劣等生も亦優等生と同様少いものと、世の中はきまつて居る。大衆は即ち大衆で、優等でもなければ劣等でもない、先づ平凡なる多數である。大衆は取りも直さず凡衆である。社會の最大多數たる凡俗、そのものである。

大衆統制の社會は、凡俗の世の中である。現代は凡俗化しつつあるが世相である。現代社會は凡衆の社會である。

現代人心の傾向が彼が如きに際して、此の凡衆的社會、凡俗化しつつある世相では、運轉手なしに走り出した自動車と同様、何

處まで脱線するか知れぬ危険なる状態で、懸崖から墜ちて粉碎するか、川や池にはまつて泥まみれになるかがおちである。世の中は小數でよいから指導階級がなければならぬ。腦の發達があるとなないどが人とアミイヴァとの差別である。

シグナル見ずの機關手

人間社會、幾十百代の徐々なる發達、前代の發達成績を反古にせぬ所の加速度的發達、即ち社會進化の大なる產物として、禮儀といふものが出來、いづれの社會でも、社會が儼然と成り立つて居る限り、それが常に口を利いて居る。外人の言語が判らぬと直ぐに缺舌と罵ると同様、異人には禮儀といふが丸ツ切りない、彼等は夷狄である、禽獸である、などと罵るは大なる心得違ひで

ある。

令せずして行はれ、何等やかましき言舉せず、靜にして秩序正しく物事が運んで行く不文律は、此の禮儀が儼存するからである。社會の中の各層の中で、禮儀に於ける先輩は上流階級を推さざるを得ない。下流階級、大衆、擡頭の時代には、兎角禮儀が閑却せられ、蔑視せられ、その結果、衝突せずとも濟む事に衝突が矢鱈に起り、物言ひがなくとも好い處に無闇に物言ひが起り、世の中は蜂の巢をつゝいたやうに騒然として、而も物事の運びが夥しく沮害せられ、停頓する、といふ氣の毒千萬なる状態に陥る。

川汽船が川の中流で行きちがふ、數町の距離から或は一聲、或は二聲の汽笛を鳴らして、右によける、若くは左によけるの合圖をする、これが即ち禮儀の初等なる一例である。田の畔で農夫

が出逢ふ、數歩前から「好いお天氣で……」と挨拶する。右の汽船と同一の場合ながら、挨拶は一段と精美化されて居るだけの差ひである。

禮儀など究屈なことは御免蒙る——と、半開式自由平等主義者流は言ふであらう。彼等はシグナルを熟視せずして停車場に汽車を突進せしめる所の危険にして無茶なる機關手である。二に三を足せば五になる——それは究窟である。六とでも七とでも勝手放題に答ふる方が、成る程自由で且氣樂であらうわい。

窮狀の救濟

現代人の心理並に生活、その憫むべきうかさかせる、追々焉た

る窮狀を救濟するには、禮儀レイイをたま便るが一の手である。病氣には御祈禱よりも醫藥、現代爛れたる人心の救濟には信心呼はりよりも禮儀である。

禮儀によりて人心救濟、生活整理が出来て行く。惜いかな、現代の教化、教育に従事し、人心を指導し揮擢するの大責任を負ふ連中にも、不知不識若干禮儀教化を實行するものがあるだけで、十分の確信確識を以て此の大切な教化事項を活用するのは極めて乏しい。茲に禮儀を以て、所謂風を移し俗を易ふるの大作用を成し遂ぐる、各種の具體的事項に亘つて御話を進むるに先だち、聊か理窟張つたる話になるが、禮儀の性質、職能について、主に世の教育、教化をつかさどる、大衆凡俗に對しては先覺者たるべき諸君の參考に供へやう。

禮儀の性質種類

先づ以て儀式のお話から禮儀のお話に進まう。

儀式は、社會人衆が共同に服する所の、行事の形式である。

儀式行動には意識が伴ふ。人はやる積りで儀式をやる。この意識には二つの特質がある。その第一は儀式の整一といふ事、これには更に、此儀式に於ける先例との契合と、此儀式を執行する同時の他人數輩との行爲の、整調と、この二つを含む。第二の特質は儀式に於ける嚴肅及恭敬といふ事。

更に儀式は當該社會に公屬するもので、一人の私有ではない。故に當該社會に於いては儀式は劃一的規定となる。

嚴肅恭敬の意識は、儀式に權威を與へ、整一の意識は、儀式に特

定社會に於ける固有性及び普遍性を與へ、以て儀式をして社會秩序の一基礎たるの任務を完うさせる。

儀式には、宗教的淵源のもの、政治的淵源のもの、社會的淵源のもの、三通りがある。この三通りの淵源から流れ流れて宗教的、儀式と社會的、儀式とが出来る。

宗教的儀式には法儀、祭儀、喪儀があり、冠儀、婚儀も往々これに入る。法儀には寺院の内部に固有なる機關的法儀と、各個人の宗教行事たる歸依、拜神、祈禱、懺悔等の個人的法儀とがある。喪儀は現實の死者に對する宗教的儀式で、葬儀、居喪、服忌、觸穢を含む。但し右の逆順で、追々に宗教的性質の減り行くことは免れない、即ち次第に社會的儀式たるに向ふ。祭儀は過去の死者に對する宗教的儀式である。祭祀は往々また法儀を伴ふ。

社會的儀式は禮儀の本部である。これに様々ある。

祭祀は、慎終追遠、報本反始の大禮で、社會的協同的性質に富むこと著しい。社會の發生發達に對する功勞者恩人を、悠遠に記念し、此人格に對し此意識の發現とし、此趣旨の宣揚として營まゐる共同行事である。

冠禮は、社會成分たる個人が社會上平等分限を取得するの時機に於ける禮儀である。

婚禮は、社會成分に於ける異性兩者の結合によりて、家の發生の基礎的事實の成立に於ける禮儀である。

慶賀及弔問は、社會協同生活に於ける同情の發現たる行事が一定の方式にて固定して一般的禮儀となれるものである。

辭令應對は、社會協同生活に於ける秩序の必要から出る態度

行事が一定の方式にて固定したるものである。

贈答は、慶弔の意義を以てする以外に、協同生活の必要ではなくも、深厚を増すの作用を遂ぐるものである。臨時と定時との別があり、定時贈答は殊に社會的儀式の性質が著しい。

饗宴は、心理上、一般感情を高調にし、共同行事を營み、且思想の相互理會及び交換の繼續的機會を供するので、協同生活の深厚を増すの作用が著しい。これにも亦臨時定時の二類がある。

祭祀、冠禮、婚禮も亦多くの饗宴を伴ふ。

舞踏には、觀る舞踏と行ふ舞踏とがある。觀る舞踏は多く饗宴贈答と意義が近い。行ふ舞踏は、參加者の間に、微妙にして且諧調ある共同行事から協同生活を圓滑和融ならしむるの效あるものである。



以上各種の社會的儀式は、宗教の勢力の強大なる社會でも全く宗教から離れて存するものが多い。凡べて儀式は、法儀の外は、何れも段々に社會的儀式即ち禮儀に向うて發達し行くものである。

慣習から道德法制まで

儀式の發達する本流は禮儀となり、支流は法制となる。法制は、權威を以て、社會人衆が共同に、若くは單獨ながらも公衆の前に、服する所の行事の形式を、整一する所以の社會運營である。此權威の發動の一面が制裁である。此權威を伴ふが故に、非違を匡正するの職能を生じ、法制の統制機能に於ける劃一性が完全になる。これは儀式では見られぬ所である。

儀式の前に慣習がある。慣習の更に意識的となれるもの儀式を生じ、儀式の更に社會的となれるもの禮儀を成し、禮儀の精神的なるものに名づけて禮といひ、禮の裁制的なるものが道德を成す。而して禮儀又は儀式の更に社會的裁制を具有するものが法制である。この社會的裁制が即ち制裁である。故に法制に於ける權威は社會的なる制裁に存し、道德に於ける權威は精神的なる制裁に在るのである。

道德の諸問題

道德には二つの目がある、品性と徳教とがこれ。

品性は、各個人の修養して以て道德を體現する所以の主觀的個人的資質である。徳教は、社會人衆が如上の修養を以て實現

するを要する所の、即ち社會が人衆に要求する所の客觀的、社會的規範である。

個人が既に如上の資質即ち品性を具備し、さて如何なるが道徳かといふことを審かに承知して、社會協同生活をする以上細大となく之に由り、之を定木とし之を道路として違ふことなからんとするには、必ず道徳的、智能を具へて居らねばならぬ。この道徳的、智能の内容が即ち道徳の教誨で、それが名づけて徳教といふものである。道徳的、智能とは個人の能力からいひ、徳教とは社會が具有する規範公準から申す。右の慣習から進み來れる「道徳」は、實は此の徳教のことである。徳教は法制と同じく權威を伴ふ所の社會的公準であるが、法制の權威が社會的、他律的なるとは別で、徳教の權威は精神的、自然的裁制であるのが

特色である。

社會は大なる複雑なる體制である。社會には人々の意志の調和的協作もあれば撞着的協作もある。此間に處して協同生活を完うし行くことは、單なる主觀的資質に便るだけで萬全が期せられ得るものでない。然るに恰も好し、社會人衆が數百千年の永き經驗を経る間に、徐々に、徐々に、道徳的公準が發生して來る。原始時代には多くは自然的淘汰に由り、追々開明に進むに於いて次第に意識的又は理想的淘汰をも經、さて出來るのが俚諺、格言である。「急がばまはれ」とか、「短氣は損氣」とか、皆その例である。所へ社會の先覺者即ち聖賢が出て來て——聖賢は大衆ではない！——數多い是等人間經驗の自然的產物を醇精にし、之を統整し、之を系成し、更に自身に之を體現して一種の尊い

威嚴を附け加へ、それで出来たのが徳教であるのである。以上が徳教の社會的來歴である。

道德の尺度で徳教を測れば、徳教は理想的道德である。その發生の根底では風俗慣習と密接の關係を有して居るが、當該時代、當該社會の一般人衆、大衆に取つては徳教徳目の大部分が理想的道德であり、之を實行することは小六ツかしく、究屈で、溢るながら實行するすらも容易でない。「爾の隣人の妻を奪ふなかれ、文明國の眞人間には極めて當り前の事であるが、半開國の半獸凡俗には、一寸垢ぬけた隣りの細君に心が亂れる。本能満足主義とか自然主義とか美的生活とか一寸判らぬやうな哲學めいた名稱をこじつけ、看板を掛けて戀の三角關係、八角關係と出掛ける。さて斯かる理想的道德が全然、一般に誰にも容易く、日

常不斷に實現せられ慣行せられ了して、見在的道德に化するの曉、隣人の妻を盗まぬとて格別譽められもせぬ世の中、約束の間をたがへる方が却て難儀と感せられる時代、虚言をつくことが極めて惱ましいといふ民人、といふことになれば、即ち是れ徳教が風俗慣習と化し去つた芽、出度い時である。

この道德進化の道行き、進歩の過程に於いて、儀式、禮儀、禮が、各一里塚として聳えて居るのである。

序ながら、凡そ道德に關する、研究、問題は、三つ、から成り立つ。

其一、道德は如何にあるべきか。其二、道德は如何にして斯くあり來つたか。其三、道德は如何にせば、之を世に行はれさすことが出来るか。第一は倫理學が之を研究する。第二は社會學が之を研究する。第三は應用社會學が特定の社會誌、學民族心理

學と力を協せて之が解決に當る所である。倫理學を以て道德研究の能事了るとするの陋見に陥らぬやうありたい。本著が禮儀を説くは亦右の第三問題の現代並に我社會に於ける重要な解決を補はんとする趣旨に外ならぬ。

禮儀の職能

禮儀の職能の中、個人心性に於ける良效を通して社會に及ぼす好果が數條ある。

行動の調和。社會人衆の境遇が差ひ、行も千趣萬様で、その間動もすれば不和衝突を免れぬ。所を儀式は少くとも其形式を齋整し調攝して圓滑和融にする。禮儀は殊に社會協同生活に秩序を致すに大效ある。

行爲の修飾。行爲修飾の様式は、社交の調子より社交性を立派にし、禮儀の、特定社會に於ける固有性普遍性を通しての、社會統制の機能を促進する。

社會的實現。縦には史的發達、横には共同行事、而も整一が不可違の本義である所から、禮儀は社會理想の協同實現、社會事功の協同運營、要するに一切の社會的實現を輔成するの大效がある。殊に進んでは美術と提携して、社會文明の實現に寄與することも著しい。

秩序統屬。嚴肅恭敬の意識は、一方には社會の規模大を加ふるに隨うて複雑大規模なる自覺的有機的生活に缺く可からざる心理事項であり、他方には人々を内省深沈靜慮の境に置いて修養を深うし、從順統屬の性向を涵養する。

直接に社會の進運に參與する禮儀の職能は亦數項を數ふる。社會性發揮。禮儀は特定社會に普遍固有なるが爲に、組織的體系的なる特殊機關を具ふるに於いて殊に、社會の對外的特性を發揮し、國體、國粹の宣揚に參與する。

文明の修飾。並に

徳性の涵養。この二項は亦禮儀の綜合的面目として社會を通して實現せらるる。

繁文褥禮の由來と限度

禮儀殊に儀式は、民族社會により、又其發達の程度によりて、其種類及び繁簡に差等がある。歐西の社會には宗教的儀式が多く、東洋殊に支那社會には法政の權威と因縁ある儀式が多い。

凡そ特定社會に於ける儀式の繁簡に關して大切なる要件が四つある。

第一は歴史即ち社會的閱歷の多少である。即ち儀式の保守性から、社會の舊きほど儀式は繁を加ふるの傾向がある。

第二は權威の大小である。これは政權と政治的淵源の儀式との關係、教權と宗教的淵源の儀式との關係に見て顯著である。

第三は權威者の衰弱は儀式の繁を簡にする。

第四は儀式が自由行動に進み、即ち道義の域に進むことは儀式の繁を簡にする。

第一第二は儀式繁簡の積極的、要件で、第三第四は消極的、要件である。米國の如きは、尤も儀式の簡なる國なりと誇るけれども、それが果して二種の消極要件に富めるが爲か、又は單に積極要

件に貧しきが爲かを精査せぬ以上、其國儀式統制の將來を斷じ、果して誇るべしや否やを批判するは早計である。

第三 最大禮

國體

禮儀の最も重きものは皇室に對し奉りての我々臣民のそれである。

皇室の社會上の御地位は、實に我が國體を理會するによりて始めて判る。

國體といふ言葉には二通りの意義がある。一つは社會學上の意義で、今一つは國法學上の意義である。國法學では國體の概念は政體の概念と相對し、統治權の宿る所の主體如何に名づけて國體といひ、統治權運用の方式に名づけて政體といふ。學

者によりては國體の外に政體なく、政體國體區別の要なしと説く人もあり、又兩者對立して、一は體、一は用、必ず併せて審かにせねばならぬと論ずる學者もある。社會學上の國體觀念は、今日教育上乃至思想問題上で常に説かるゝ所のそれで、畏くも教育勅語、癸亥詔書等に宣はせらるゝ所の「國體」は、亦此の社會學上のそれに外ならぬ。

社會學では、凡そ特定の社會に固有なる特殊性質に名つけて之を社會性と呼び、特定國の社會體制に固有なる特殊性質を中樞事項としてこの社會に固有なる諸々の特殊性質を周圍とせる、恰も本丸と二の丸との關係の如くに存する其城の全體をば、名づけて「國體」といふのが常である。此中樞事項と周圍事項とは固より密接不離の關係があり、之を性質といふ立場から見れ

ば兩者同一に歸する。これは國體を具體的に見たる説明である。更に抽象的に定義すれば、國體とは國社會の社會性の究竟本體なり、これである。

帝國の國體

抑ふわが帝國の國體は、之を歴史的、事實的に觀察し、又之を社會的、規範的に考察して、概要左の如く看なければならぬ。

第一。天祖國體を肇造し給ひ、列聖之を經紀し給ひ、其間重要な帝國統治の大なる結節として天孫降臨の大史實あり、我が皇室は此重大なる關係に於いて我帝國の首長となり、我社會の主腦とならせ給へるものである。我帝國の國ヲ肇ムルコト宏遠と教育勅語に仰せられたる御言葉の裏面の事實は、實に五つ

の大なる時期を経たる變遷發達である。第一紀は天之御中主神の天地開闢である。第二紀は伊弉諾伊弉册二神の發見植民である。第三紀は天照皇大神の國土統治である。第四紀は神武天皇の天業恢弘である。第五紀は明治天皇の國運對揚である。

第二。天孫及び降つては列聖の率ゐさせ給へる臣民は、大臣大連及び臣連乃至百八十伴男百八十伴部であり、所謂骨即ち迦婆禰の體制を以て社會を構成し、皇室と一般臣民とは宗家支家の複雑なる關係に於いて存し、帝國社會は族關係に於ける一大社會の體制を具へたるものである。

第三。爾後海外關係が程々に出て來て、歸化といふ事が引續き行はれたる後に至りても、我社會組織の規範的形式は依然何等の變更を受けず、歸化人も擬制に於ける族關係の成分となり、

帝國の地域擴大し、人口増殖するの後にても、此擬制は依然として帝國社會組織の本質となりつゝあるものである。

第四。されば政權の寄託が、或は權臣に歸し、或は武門に移る等の出來事があつても、國體には何等の増減紛更なく、唯政治の實體に若干の變更を來せるだけの事であつたのである。

皇室の社會上の御地位

國體の本義本質を、その骨髄に於いて大體に説けば右の如きものである。されば皇室の社會上の御地位は、直にこれから明かである。

- 一、皇室は國の首長にあらせらる。
- 二、皇室は社會の主腦にあらせらる。

三、皇室は我社會の無始より無終まで其御地位の變更ありせられぬ。

四、皇室は國の國民社會の人衆の史實的擬制的宗家、即ち族制組織の本源中樞にあらせらる。

五、皇室は政權を常に變らず、幾久しく把握し給ふ、唯その行使は或は直接に或は間接に爲し給ふこともある。

六、皇室は教化の本源中樞としての社會運營の大柄を把らせ給ふ。殊に禮儀、就中皇祖皇宗及び神祇に對する禮儀、且つ凡そ教化の大本に關する事項に於いては、原則として直接に大躬親ら事に當らせ給ふ。

七、皇室は軍事の大權を常に掌握し給ふ。

八、經濟運營に於いて直接事に當るは、あめのしたのおほみかたから天下公民、即ち社會一般

人衆であるけれども、其の樞機は皇室が常に大御躬ら之を執らせ給ふ。御一代に一度行はせらるゝ大嘗會、毎年一回行はせらるゝ新嘗祭は即ち其の事證である。

九、以上の如き皇室の御地位、其の性質から、皇室は社會上榮譽の最高淵源であらせらる。

十、皇室は臣民子愛の情を儲へさせらる。獨り現代の臣民が現代の皇室に奉仕するのみならず、臣民の歴世の祖先も歴代の皇室に奉仕せるが爲に、皇室と臣民との關係は年を逐ひ代を逐ひて、加速度の割合で深厚を加へつゝある。

最大禮の項目

我が社會人衆、我が帝國臣民の皇室に對し奉りての禮儀は、國

體を淵源として發生し、皇室の社會上の御地位を根柢として送り出づるものである。

第一、皇大神宮。皇大神宮は我が肇國の天祖に對し奉りての至高至大の敬禮の對象にあらせらる。外宮は社會經濟運營の中樞たる意義に於いて重大なる偉績の主體にあらせられ、皇室でも亦既に之を内宮に配して敬禮を厚うし給ふに鑑み、一般臣民は此聖旨を奉體して等閑ならぬ態度を保たねばならぬ。

第二、賢所。賢所は天祖の靈位を宮中に奉安して、日夕皇室が禮儀を厚うし給ふ所の對象にあらせらる。朝臣の輩時に之を敬禮する特殊の恩命を領する。其場合、其敬禮は全く皇太神宮に對し奉るに準すべきもの。皇靈殿は歴代の皇祖皇宗、皇后皇妃皇親の靈位を宮中に奉安せる所である。神殿は八神及び天神

地祇をあはせ祭り給ふ所である。俗に賢所と申上げる宮城中の一廓は、中央に賢所、向つて左に皇靈殿、右に神殿、就中中央の賢所は一段大きく、莊嚴なる三殿が列び建つてある。元始祭以下の各祭日に於いて勅任官、勳二等功三級以上の有勳者は、皆之に參拜を命ぜらるゝこととなつて居る。

第三、山陵。山陵は歴代列聖の尊き聖塋である。皇室の殊に敬禮を厚うしたまふ所で、臣民亦常に聊かも其尊嚴を忽せにしてはならぬ。御墓は皇族の御塋域で、山陵に亞いで尊尙を懈るべからざるもの。傳説地は御陵墓として幾分確認の疑はしく考證の不十分なる所である。一旦之を汚瀆しては取返しのつかぬ事になるに注意せねばならぬ。古墳は未だ傳説地とまでにも考證想定の進まぬものながら、或は高貴に關するものなしと

せぬから、之を軽く看過さぬやう注意せねばならぬ。

第四、皇居。皇居は我が至尊陛下をはじめ奉り皇室の在らせらるる所を申すので、其建築、堤隄、園池、叢林といふ物件をいふのではない。二重橋に参りて集うて全國の臣民が如何に嚴肅なる感念に打たれつゝあるかは人々の經驗し目撃する通りである。離宮は時に行在せさせ給ふ所。御用邸は皇族が常時に若くは臨時に御成りのある所、時としては陛下の御出になることもある。たとへ御使用なき時にも肅然たる敬意を遺れてはならぬ。

第五、行幸。或は演武のため、或は民情御視察のため、其他臨時の御用務のため、各地方に陛下の御ゆきまます行幸は、臣民が直接陛下を拜し奉る所の洵に光榮ある機會である。この機會は又

陛下から特に臣民に許し給はるのであるから、猥に逃げたり避けたり蔽うたり匿れたりするは、却て御思召を奉戴する所以でない。行在所は行幸の際一時行在の場所に充てさせらるゝ所である、後に至るも永く其神聖を保持して餘徳を仰ぐことは、實に臣民の至情であり、又皇室に對し奉りての禮儀の微妙なる發露である。御小休所は更に短期なる行在所であり、行幸の際半時又は四分一時ほど短期の御少憩に充てらるゝ所である。新潟縣北蒲原郡濁川村大字新崎の千歲園日長堂の如きは明治十一年北陸行幸の際一個の御小休所に過ぎなかつたけれども、其家の主人は最も鄭重に且大規模なる保存を遂げ、其後財團法人と爲し、永久に御遺迹を保存する道が立ち、明治天皇の御杖をもいたゞき、今日では立派に北越の一大名所となつて居る。全國

には少からず此類があらう。實に我國の一つの誇りともすべきものと思はる。

第六、拜謁。常時宮中に於いて、又は一定の式典に際して、又は行幸の場合に、特定の官僚又は臣民に賜はる所の光榮は實に拜謁である。臣民は此特殊の光榮に對し、自ら我心を肅^つみ、至大の敬禮を重ねるが道である。

第七、御眞影。御眞影は陛下の御寫眞である、御映像である、髣髴として其所に在らせらるゝが如きものである。學校、官廳等、特に御思召を以ての御下賜に對し奉りては、最も神聖に奉戴すべきは勿論であるが、唯宗教上の崇拜にまぎらはしくせぬやうの注意が肝腎である。坊間に複寫し奉りての授受は、褻瀆に陥らぬやう嚴密なる注意が肝要であり、新聞雜誌に在りては殊に

濫に陥らぬやう取締が切要である。

第八、詔勅。詔勅は陛下の臣民に向はせられた御言葉である。事は國事或は軍事、宮中又は府中に關する。人は一般民衆或は特定人に關する。極めて森嚴なる態度を以て奉體し奉行し、且つ機に臨み折に觸れて捧讀し、記憶し、感銘を新たにすることが大切である。

第九、敬語。皇室に對し奉りての重く且つ厚き敬禮の誠意は我國語の特色と結合して種々の敬語を生じて居る。此敬語を注意することが皇室に對し奉りての禮儀の重要な一目である。抑々敬語には第二人稱の敬語と第三人稱の敬語とがある。第二人稱の敬語は至尊に咫尺し奉る臣僚の外、滅多に之を用ふべき機會がない。一般臣民の最も嚴肅なる注意と實行とを要

するは第三人稱の敬語である。敬語には名詞に於けるそれと動詞形容詞に於けるそれとがある。名詞に於ける敬語には人稱名詞のと普通名詞のとがある。人稱名詞の敬語は敬稱で「陛下」「殿下」と申上げるのがそれである。動詞に於ける敬語は敬語助動詞及び敬語動詞から成立つ「見る」を「みそなはす」といふは就中敬語助動詞の例で「天覽あらせらる」といふは特殊なる動詞を用ふるの例である。形容詞に於ける敬語は多く敬語小詞即ち「御」といふ言葉を附ける。「御」は實は「オホ」即ち「大」と「ミ」の二語が繋がつて「オホミ」となり、或は「オホム」となり「オホン」となり遂に「オン」となり「オ」とまでなつたものである。本來「ミ」だけで敬語の役は十分であるがこれに「オホ」を附けるは實は皇室にのみ限るべきである。更に物名詞は皇室に屬する事物に對して亦同様

の敬語小詞を附ける例へば「御劍」又は「大御大刀」といふの類である。

敬語は更に自己又は自己の所親を卑下する人代名詞を以てするの様式がある。「臣」又は「微臣」外人ならば「外臣」といふが皇室に對し奉りてのその例である。

大凡そ敬語の發達は社會階級、社會體統、社會秩序の發達を表する大事實である。故に敬語を教へ習ふといふことは複雑なる發達せる社會の教化に於ける重要事の一つである。

臣民社交の基準

凡そ我國に於ける禮儀の根源は皇室に對し奉りての敬禮の表象並に其の心事に基づく、即ち臣民同志の社交もこれから基

準を取るべきものである。

宮中には宮中席次といふものが微妙なる考慮を以て定められてある。この宮中席次が未だ我國一般の社交界に準用せらるゝに至らぬことは甚だ賞めたことでない。眞面目に席次を作らねばならぬ場合にも席次不同で方つけるか、若くは幹事が私情で好い加減にきめる。世界一般に航海船舶の中で、食堂に於ける席次は非常にやかましい。曾て日露戦役の英國出張から歸朝の末松子爵一行は、その爲めに體面を重んずる上から數日に渡り食堂に出なかつた例さへある。席次を鄭重に考慮することは世界的禮儀作法である、それを忽諸にするは半開乃至野蠻社會又は民人である。この一般的準繩として、わが國人相互の間で、宮中席次を典據とするは、直に是れ尊皇の一つの現

れである。

「閣下」といひ「殿」といふが如きも、一定でなければならぬ。宮中席次が陸軍少將や縣知事より上なる高等學校長は少くとも彼等と同様に「閣下」と稱せられねばならぬ。それを「殿」では猿芝居になる。一列に有爵者以外には「君」といふなら、それはそれであり。併し俄に將官から「閣下」を奪ひ去ると軍隊艦船の秩序が一變する。それが其儘であるなら知事も閣下、以下循環論法になる。

爵位の社會的價值

序に爵位勳等の社會的存在の理由について一言しやう。

「爵位勳等尙ぶに足らず」と口に言ふ人々がある。此連中に二

通りある。一つは軒冕を泥塗にするの概ある無頓着連、二つは既に之を得た上で格別自ら之を有り難いと感せず、即ち馴れつこになつた連中である。此二類の連中が、本人だけに取つて爵位勳等尙ぶに足らずといふは御随意である。併し自分には尙ぶに足らずといふことと、社會に爵位勳等が無用なりといふこととは全然別物別事である。金が有り餘る實業家が男爵運動をしたり、正六位を戴いて喜んだり、桂がどう、大隈が何のそのと呼び捨てにする新聞記者が、其の大隈の執り成しで勳三等を貰ふと、歎天喜地の状態を呈する。金持から見たら、金などはどうでもよいであらうが、貧乏者には金が仇かたきの世の中である。

北ない事はやめにして、何よりも日本國民に取りての榮譽は、榮譽の最高源泉に在ます所の皇室より賜はる所のそれである。

それを敬み畏みて尊たよび有り難がるのは、即ち是れも亦皇室敬禮の清らかなる精神の現れの一つである。

尙附け加へて一言する。若しも國民皆々が「官位勳等尙ぶに足らず、何よりも金が貴い」といふことになるならば、官吏の俸給は今より約そ三倍にせねば埋うらぬことになる。國民の負擔は三倍することになる。官位勳等不足尙論は、實生活を無視する、算盤を知らぬ無茶論と呼ばれても仕方があるまい。

第四 神社尊尙

神社の本質

皇室に對し奉りての禮儀の次に來るお話は神社尊尙である。神社は我が國に固有なる一つの禮儀制度である。神社は我が國體と密接不離の關係を有する。然るに世間には神社について種々の議論や誤解があるから、聊か神社の本質について先づ説くの要があらう。

神社の主體は祭神である。祭神は過去に於いて現實的生活を有せし人格で、宗教上の神佛の如き超絶的存在でない。隨て祭神は宗教的崇拜を受くべきものでない。若し宗教的崇拜を

するなら、其人は祭神を敬禮せずして、自分が祭神に着せたる着物を崇拜するものである。

神社の行爲は奉齋である。祭神を奉齋するは墳墓よりお墓山陵の尊重と、其の意義に於いて變りはない。超絶的存在でなく、過去に於ける現實的人格たる祭神、この祭神に關係深き人々の本に報い始に反るの至情至誠より發して、時の古今に亘つて渝らずに恒に存する所の特定社會に於いて、特定社會を介して現實的存在を會て有し今も有し將來も有する偉大なる人格即ち祭神に對して、斯の社會の人々が尊敬の禮儀を效す行爲、これが即ち祭神奉齋の本義である。

凡そ人は社會に投影し没入するに於いて社會的存在を得、永遠の存在を得、不滅の生命を得る。人は生れ、生き、老い、死ぬ。社

會は常住である。恒久である。社會は大なる樹木である。人はその細枝に附ける。春に芽ばえて秋に枯れ落つる一枚の葉である。人は社會を介して不滅となり不朽となる。「死生を一にする英雄の境地」「生死焉ぞ論するに足らん」といふ豪傑の立場は、斯様にしてのみ、社會的にのみ達せらるる。此の恒常不滅の人格が、神社の祭神である。之に對する奉齋は此の投影、没入の社會、渾一體から此の祭神に對して爲さるるもので、其の行事の現れが即ち祭祀となるのである。

實本の社神

されば、宗教的崇拜は神社で行はれてはならぬ。湊川神社の楠公といへば、人々が自分の頭で拵へ出した幽霊やゴツトのやうなものでなく、明々白々に古今の歴史に於ける定つた一人、楠正成其人であるのである。お詣りをして居る何某と祭神楠と

は現實的存在として相對して居る。されば又個人的福利を神社で求むべきものでない。楠公に戀の三角關係の成就を願し、又は相場でばろい儲けを願するは塗轍もない僻事である。唯社會的福祉を何某が祈るの心には、祭神も亦之に和せらるべしと推定し又希望するが「祈願」の眞意義である。敵國降伏を日露戰役で祈るなら、楠公は必ず共鳴せらるるであらう。相場の賣り方と買ひ方と雙方の祈願に向うては、楠公もさぞお困りであらう。お困りにならない祭神なら楠公ではなくて狐が楠公に化けて居るのである。世には楠公嫌ひの狐好きが多い。又狐で一もうけしやうとする連中もある。さて又來世の冥福などを神社で祈るなら、それこそ方角違ひの甚しきものである。神社の本質は飽くまで非超絶性を有し、神社の規範は社會的

實理的性質を有する。

神社詣でに心得違ひのものがあるとして、神社は心得違ひのもの考へて居る通りのものだと言ふ。馬鹿が言ふ。日本全國に在監者が何萬人居る、故に犯罪は道德だ、と同じ、馬鹿が言ふ。

祭神の種類

祭神には凡そ十通りある。神社も此點から分別すると十種になる。

- 一、天祖。皇大神宮及び其の分祀たる各地の神宮がこの祭神を奉齋する。
- 二、天孫。天忍穗耳尊より鷓鴣草葺不合尊に至るまでを各々奉齋する英彦山神社、霧島神宮、鹿兒島神宮、鶴戸神宮等。

三、皇祖。宮崎神宮、檀原神宮等にて神武天皇を奉齋する。

四、皇宗。皇祖以後列聖相承けて以て先帝陛下に至る、連綿たる列聖を奉齋する。平安神宮、殊に近く新たに奉祀せられたる明治神宮等がそれで、熱田神宮、氣比神宮は之に准ずる。

五、皇族。遠くは阿蘇三神の一柱たる建磐龍命即ち神八井耳命の御子様で、神武天皇の御孫様、近くは佐渡に於ける二宮即ち順德天皇の御子様等、數多く奉齋せられてあらせらる。

六、氏神また産土神。氏の祖宗を氏族社會が奉齋するのが氏神、一郷一市域に其の開拓の功業を記念するのが産土神。

族制社會たる我國では最も多く氏神と産土神とが一致する、よりにて屢々混同せられ、それで實際には別に差支がない。

七、功臣。湊川神社の楠公、藤島神社の新田義貞、名和神社の名

和長年、建勳神社の織田信長、豊國神社の豊臣秀吉、東照宮の徳川家康等が著名なる例。幾多の功臣を合祀奉齋する特殊なる神社に招魂社があり、その最大なるが靖國神社である。不肖講者の同胞雪峯もその祭神の一人である。誰が雪峰に向うて相揚や縁結びを祈るものぞ。

八、偉人。功臣と偉人とは多く同一であるが、神社奉齋の客體としては、之に對する一般人の心持又は形式の差ひから、自から其品を異にすべきものとなつて居る。奉齋が功業恩澤に對する場合には第七類に入り、單に偉大卓越なる人格に對して永く其人格を仰ぎ其面目を懷ふ場合には此第八類に入る。藤島神社、松蔭神社、乃木神社などがそれである。西洋のパンテオン、英吉利のウエストミニストル寺廟は、此

第七第八類の神社と頗る其趣旨を同じうするものである。

九、天神。天地開闢の初より生れ出で給ひし神々。多くは上述のいづれかと合祀せらる。八神殿など最も好き例。

十、地祇。天祖の正宗に屬せざる神々を奉齋する。出雲の大社、熊野神社など尤も著名なる例。但し此類は第九と共に正史以前の神々に屬し、其御事蹟の確かならぬが多く、殊に天神の奉齋には動もすれば超絶的の神性が附け加はるに流れて行く。第九第十の二類は、最も多分に神社の眞面目を離るゝの危険に近づき易い。

神社の形式格式

形式、格式上から神社を區分すると十二等となる。

形式は奉齋行爲の主體による。一が皇室が勅使を以て奉齋
 あらせらるゝもので官幣社。二が國家實は國民社會全體で國
 幣社。三、四、五が地方就中府縣鄉村で縣社、郷社、村社。六が家、七
 が個人で無格社。

右の中更に格式の細別がある。官幣社には大社、中社、小社あ
 り、其外に別格官幣社ありて、功臣を奉齋する神社は多くこれ
 ある。國幣社にも大社、中社、小社あり。以下無格社に至る、十一
 等。

其の最高に在るが皇大神宮であらせられ、畏れ多くも至尊陛
 下が大御躬自ら奉齋を遊ばさるる所である。故に神宮祭主は
 親任で皇族を以て之に任ずる、所謂大御手代として奉齋し祭事
 を管理する。但し公爵を以て之に任ずることだけは出来る、是

は萬一皇族に祭主たるべき御適任の方があらせられざる場合
 の備へに過ぎぬのである。神宮司廳官制で、祭主の下に勅任又
 は奏任の大宮司あり、其下に奏任の少宮司あり、又奏任の禰宜が
 ある。官國幣社の宮司は全國で六人だけが勅任で、其他はすべ
 て奏任である。又禰宜はすべて判任であるのに、皇大神宮は獨
 り斯様に重き制度となつて居る。

變的神社

神社といふ名はありながら神社の本質と違ふもの即ち多少
 の不純又は變質又は反質を有する變的神社がある。之をお話
 すると神社の本質が一層明かになる。中間的のものも様々あ
 るが、著しきものは三類である。神道の殿堂、これは神社といふ



名目を有たぬ。兩部の神社と一般淫祠、これは名目を有つて居る。

神道の殿堂は今日では名實共に神社とはつきりと區別されるやうになつたが、神道崇拜と神社奉齋とは由來久しく混同されて居り、一般人衆の思想に於いては、今尙其性質區別の曖昧がある。抑々神道といふは一種の宗教である。其の神位は、多く之を我國の歴史上の神々に採り、其の教誨や其の宗義を必ず若干我國民族の神話から、又は正史からも採り、然も勝手に之を加除し、更に勝手に之を解釋し、殊に儀式については極めて自由に勝手に考へて新たに拵へる。かゝる手續で成立し、多くは未熟なる宗教で、次第に様々の宗派が出來、それ等の總稱が即ち一般に神道と呼ばれる。神道と神社との區別は宗教たる否とに

存し、兩者の混同は神道の神位が神社奉齋の祭神とまぎらはしきに存する。維新後、殊に明治の中葉以後、宗教たる神道は宗教局、神社は神社局、兩者全く別異なる行政機關で管轄せられて居る、これは當然である。

迷ひの種

我國神道の興隆には佛教の刺戟が與つて力あり、嘗に外から刺戟せるのみならず、その實幾分は佛教の變遷、其者の産物でもあつた。

抑々佛教が初めて我國に移り來つた際を顧ると、外國の社會性即ち社會特殊性の宿の一つである所の佛教は、どうしても我が國體、我が社會と、若干の矛盾杆格を儲へて居つた。爲に紛亂

相踵ぎ、其間皇子厩戸の如き博大なる頭腦を以てしても、充分に化醇淘汰の功を成すことが出来ず。後世幾代を経て漸く折衷調和に赴かんとする機運の産物として出て参つたのが、本地垂迹、神佛同體の教説ある。

藤原時代から鎌倉時代に至り、新たなる佛教各派が生じ、調和融合の特色が最も著しくも立派に出来たのが曹洞宗の尊王主義、日蓮宗の護國主義に現れた。又所謂髡題目の曼陀羅に於いて、佛教の崇拜客體と我が神々とは、一の系統構造に於ける單一の體系となり來つた。それが論理上更に一步を進めると佛主神客の此體系は一轉して神主佛客の新體系となる。更に之に次いで出でたるは此佛客の影を薄うせる、神主的新體系である。前者が兩部神道で、後者が神道である。

兩部神道に對しては、維新以來斷然たる行政的處理が施されなければ、今なほ其神格が神佛兩種の性質を混有する曖昧なる崇拜の殿堂がある。是等は皆變的神社として常的神社から峻別さるべきものである。

淫祠

變的神社の最も極端なるものは淫祠である。其神格即ち崇拜の客體は、我が神々とは何等の交渉を有たぬにも拘らず、往々名號を偷み、若くは神々を傍に置いて其名を利用し、然も實は此特殊神格が實地の主人公であるのがある。

此類の一は印度教の神格である。即ち印度教各派の神格が、佛典を通し、又は他の方法によりて我國に渡來して淫祠の主體

となつたものであつた。例へば生殖器崇拜の如きは其の主なるもの。

二は物的神格である。物神、就中個物神を崇拜の主體とするもので、庶物崇拜の神格に往々神社の神格を附會する、困つたものである。稻荷神社が日本全國に數知れずあるが、本當の稻荷、京都府紀伊郡深草に鎮まり座す官幣大社稻荷神社の祭神は、秦氏の祖神三座、後に田中神四大神を配して五座となつて居る、是が食貨の神、稻穀の神たるから流れ、稲を護る益獸たる狐に移り行けるが如きは、右の一例である。

三は祭天的神格である。全般物神の崇拜、隨て天地の各種現象を崇拜の主體とするもので、例へば天地雷霆風雨其他を對象とし、往々冠するに神名を以てすることは前二類と同じである。

併しこれになると淫祠の性質が頗る軽い。

凡そ淫祠に最も屢々見る所は、其の正面若くは側面に神名を掲げ、神々の御位を設けるといふ一事である。苟も其の眞と假とを峻嚴に甄別し、其の假託なるに於いては斷然迷はず、之を待遇するに淫祠を以てするでなければ、所謂紫の朱を奪ふの弊が蔓つて、忽ち常的神社其者の威嚴を蝕ふに至らう。神社行政の方針の一つは、慎んで常的神社の擁護の爲に淫祠を處理するに在らねばならぬ。

祭典行事

祭典は、本來參拜人即ち神社奉齋の主體が直接之を營むべきものながら、特定の常設機關即ち神職が之を營む所の間接の行

事に名つくるが多い。かくて参拜人が營む行事は拜禮に限られ、これが祭典の一目となる。

祭典の行事は四つである。

第一、禊祓は至純至誠を旨とし、奉齋の眞意義を完うせんが爲に清淨潔白を以て祭式を奉行すべく、身體並に祭式の物件を淨むるの儀式である。禊は身體の方で、祓は物件の方である。

第二の獻供と第三の神樂とは、神に對するが現實の人に對する趣旨に外ならぬことの極めて有力且明白なる證據である。

我々普通人の交際に於いて、饗宴を催すが獻供で、そこへ歌舞音曲の餘興を添へるが神樂である、何も異つたことはない。

第四、拜禮には有言拜禮と無言拜禮とがある。拜禮の趣旨を言葉に表はす、之を一般に祝詞といふ。就中、神を個人として其

のありし日頃を追念するときには誄詞しゆいごといひ、儀式の莊嚴を期して禊祓を慎重にする爲に申すときは之を大祓おほはらひの詞又は壽詞しゆごといふ。無言拜禮は、唯拜禮の趣旨を心に念じ、默念冥想以て拜禮の儀を成す、その身體に現るるやり方は拍手と拜跪とである。拜跪は普通の人々の間の禮儀にもあるが、拍手は拜禮にのみ特殊で、神社奉齋を爲す我國民禮儀に特殊なる重要事項の一つである。拍手の起源は我民族と共に古いものであらうが、却て明確を欠いて居る。

祭典の右四要目のほか、附隨事項として、神徳を顯揚するを主旨とする旗幟、神輿の巡啓、神符の配布、神酒の奉戴、直會なほらひの頒與等がある。神符の配布については、平田篤胤の『神道大意』に、全く佛教から出て、伊勢に於いても斯様な事が佛教との混同から

行はるるに至つたのであると、詳しく論じてある。神符既に然りとせば、神輿の巡啓も亦其類かも知れぬ。

（以下は非常に薄い文字で印刷された文章がほとんど読めず、主に「神符既に然りとせば、神輿の巡啓も亦其類かも知れぬ。」の続きと思われる）

第五 家 禮

家の裡に行はるる禮儀

家は國とは比較にならぬほど規模の小なる社會體であるが、併し殆ど國と同様まどまりたる社會體である。家の裡に行はるる禮儀が家禮である。家禮は一に現實の人々の間の禮儀、二に現實ならざる人に對する禮儀、三に神佛に對する禮儀、四に身を持するの禮儀、此四つの部類から成り立つ。

現實の人々の間の禮儀

家禮の第一類には、

父母祖父母に對する子や孫の、

兄弟に對する弟妹の、

夫に對する妻の、

妻に對する夫の、

弟妹に對する兄弟の、

子や孫に對する父母祖父母の、

家の各員に對する婢僕の、

婢僕に對する家の各員の、

婢僕相互の、

それ／＼禮儀が含まれて居る。

我國では、態度より言葉遣ひまで、夫に對する妻は大に敬禮恭順を旨とするが、西洋では、夫妻は同等の立場に居る。夫が妻を

呼ぶにも、妻が夫を呼ぶにも、同じく呼び捨てである。我國でも所謂下流社會ほど夫妻は同等に近い。併し東西上下を問はず、同等不平等は別として、夫妻の間に禮儀がなければ、其間柄が圓滿に行くものでない。

兄弟より弟妹に對するは、階級主義が、どちらかといへば西洋の方が却て嚴重である。西洋では略々年齢の十五歳に達するを時期として、其れまでは如何なる子供も如何なる人からも呼び捨てにせられる、自家の婢僕からも左様である。我が縣廳所在地の小學校などは全然雲泥の差である。

現實ならぬ人に對する禮儀

現實ならぬ人に對する家禮は、

祖先に對する禮儀

過去の族人に對する禮儀、其の小別けは

靈位に對する禮儀

墳墓に對する禮儀

を含む。

祖先に對する禮儀は、父母祖父母に對する禮儀の延長である。祖先は現實其處に居らずとも、祖先について語る場合は、父母祖父母について語る場合と同様であり、祖先の遺物に對する取扱振りは、父母祖父母が現實用ゐて居る身廻りの衣服器物等に對する取扱の禮儀と何等異なる所あるべきでない。

靈位は、佛教ならお内佛に於ける木主所謂位牌、神葬祭なら御靈代である。靈位に對する禮儀は祖先に對する禮儀の聊か形

を轉じたもので、心持に於いて何等異ならぬ。かゝる禮儀其者は一種の歴史的成績であるから、一々理屈を考へて解らぬ事があつても、懈ることなく、撓むことなく、其日其刻限、行ふべきことは遲滯なく實行するが、禮儀の本旨を完うする所以である。

墳墓に對する禮儀は、我國のみならず、西洋其者でも何等我國に劣らず大切にせらるゝことを知り置く必要がある。殊に加^カ持力^{トリツク}の國々、就中佛蘭西、伊太利などでは、我國の西洋擯斥論者の想定や、我國に來る耶蘇宣教師の所説などは、甚しく距離があり、徑庭のある實行を、比々として目撃させらるる。墳墓の立派さは西洋諸國は我國とは比べ物にならぬほどに發達して居る。伊太利各市のカンボサント即ち墓地は、美術的名所になつて居る。カンボサントは「神聖なる郊野又は地域」といふ意味で、幽靈な

どは出たくも出られぬほど立派で清浄である。固より「禮は其の奢らんより寧ろ儉なれ」であるが、西人すら斯様に墓を氣をつける、まして我邦人をや、でなければならぬ。

神佛に對する禮儀

神佛に對する禮儀は

敬神の禮儀と

拜佛の禮儀と

である。敬神の禮儀は更に

祭日の禮儀と

拜神の禮儀と

の二つとなる。

祭日の禮儀は西洋にもあるが、我國には國家の大祭日として法を以て設定されて居る日がある。其他地方又は郷土の祭日としての設定祭日もある。是等の祭日には、一つは國民的記念日、二つは偉人の高德を追念する國民的祭日、この二様がある。國民は國旗を掲げ、一日の家業を休み、心を淨く直くあか明くして、嚴肅に且和氣霽々裡に一日を了らねばならぬ。茲に注意すべきは、國民的記念祭日に於いて、國民各個各家の歩調の揃ふべきことである。西洋で却て此弊がないのに、我國殊に村落に於いて此弊が著しい。一體我國民は曆の重んずべきを知るに於いて低能である。一九三一年などを振り廻すも、村落に元日が二度あると同様、この低能の症候である。今なほ舊曆の五節句を祝ふよりも紀元節天長節に對して冷淡であるのも亦同様の現象

である。

拜神並に拜佛の禮儀は、割合に我が篤志の家庭に於いて善く行はれて居る。拜神拜佛行爲を規則正しく年中毎日懈らず繼續するといふ其事は、國に對し家に對する實務、職業の懈りとなるの弊害を伴はぬ限り、實に稱揚に値する事柄である。假令無意味の事柄でもきまつて毎朝毎夕必ず之を實行するとの心掛は、それで既に大なる意義を生ずる。

食事の禮儀

身を持つるの禮儀の第一は食事の禮儀である。凡そ個人々々が身を持つるの禮儀を全うせざれば、直に社交生活に支障を來たす。殊に家といふ社會では、家の人々は明けても暮れても

協同生活を營んで居る禮儀を以て其の矛盾杆格を調節せねば、些々たる事から甚しき協同生活の破綻を生ずる。一家の人々の從事する所は銘々で差ふ。或者は農業、或者は教員、子供は生徒。故に四六時中家の人々が一所に會すること、を強ひてやらうとすると、直にそれぞれの業務に支障を來たす。然るに否でも應でも必至的に同様にせねばならぬ事柄は三度の食事である。此時期、食事の行事を利用して一家團樂をするは、如何に勤勉なる家風の人々でも行ひ得る所である。そこに食事の大切さがある。

「食するときは言はず、寝ぬるときは語らず」といふに一種の解釋を施して、食事は無言の行でやるべしといふものがある。一方には西洋で行はるゝやうに、食事の際に輕快なる談話を交換

しつゝ行ふもある。「言はず」は大氣張りで物言はぬこと、「語らず」は一寸した話をさへせぬこと。人間不具者でない限り、静に話をして直に食相が崩れるものでない。食時には議論はいけないが罪もない事を話すはよい、寝るときは輕快なる話をも避ける。それが適當である。

西洋では、食時の禁物として、病氣、宗教、政治の話は避けることになつて居る。病氣は陽氣なる健康増進と矛盾し、且多く身體の各肢節や臟腑に話が觸れる。宗教と政治とは兎角宗派黨派に觸れ易く、列坐一般の和氣同調を破り易い。家庭では宗教と政治とは餘り問題にならぬが、病氣の話は食卓では避けるが宜い。

坐作進退

坐、作、進、退の禮儀は身を持する禮儀の第二である。西洋造りの建築ならば、開き戸を閉めるときに爆音を立てるのが、西洋小笠原に副はぬことは申すまでもない。日本の建物で戸や襖を閉めるに亦同様の注意が必要である。九尺四枚立の襖である、粗雜（かたざら）に開閉すれば、大工は巧に建築して居つても襖が敷居と鳴居との間に斜に嵌つて、突くも引くも出來ぬやうになり易い。この類、枚舉に違ないが、細心に注意を要する。

日本は坐禮の國であるから、坐ることが卑者の尊者に對する尊敬の禮儀である。即ち尊者は立ちながら物を言うてもよいが、卑者は坐つて物を言はねばならぬ。さて此習（なづか）はしがついて居

るから、兎角西洋建築の應接所に這入るとまごつく、或は反對の事をして敬禮のつもりで居る。西洋では卑者が立ち尊者が椅子に腰掛ける、これが定まつた禮である。椅子に倚る事が即ち西洋の着席で、尊者先づ着席し、次第に卑い人々に及ぶ。故に謙遜なる態度を持する者は成るべく椅子に倚ることを遠慮する、その結果立ちて物を言ふことになる。和洋反對の點に注意を要する。

出入起居

出入起居の禮儀が身を持する禮儀の第三である。種々雑多ある中で一二の要點を挙げれば、先づ出入について、外出の際には家人に其の行く處を告げ、歸宅の刻限は成るべく精確にして

家人に熟知せしむるの注意がありたい。

唯此點にも亦和洋の間に若干の差がある。これは家屋の建築から來たものと見られる。日本では出入に對する送迎といふ事が盛に行はれるが、西洋ではさほど盛に行はれぬ。我が建築は戶外と家の内とが割合に境界の隔離が少い、多くの場合玄關の戸が開け放しである。西洋の玄關は我が土藏の戸前に近い、戸は閉め置くのみならず、殆ど毎に錠を嚴重におろす。故に外出の場合には家人は各々鍵を携へ、これで錠を開けて家に入る。門番のある家はこれが錠を開けて呉れる。或は又錠でなくとも内方で閉まつて、門で鈴を推すと門番が空氣仕掛で玄關を開けて呉れる。

出入の大袈裟は頗る良風美俗である。併し之に伴うて送迎

の大袈裟が往々あり易い。旅行出發歸住の場合には殊に一種の示威見え坊になり易い。「禮は其の奢らんより寧ろ儉なれ」で、出入は大袈裟ならんより精確を旨とすべきである。

物の扱ひ

物に對する禮儀——といふと一寸をかしいが、これが身を持つる禮儀の第四である。實は物に對するが取も直さず自己に對する所以である。物の置き方をぞんざいにして、曲ぐ可からざるを曲げて置き、響を生す可からざるに大きな響をたてる、斯の如きは皆自ら敬せざるの致す所である。

水差一つを置くにせよ、箸一せんを置くにせよ、乃至傘を始末するにせよ、帽子を掛けるにせよ、すべて物に對するにはそれぞ

れに禮儀がある。帽子は人の踏むやうな場所に置くべきでない。傘は雫の滴つて困るやうな所に置くべきでない。水差は水がこぼれぬやうに、靜に且正しく置くべきで、箸はそろへて膳又は食卓の、然るべき所に整然と置くべきである。食卓に對して家人が諸共に食事するにしても茶碗、汁碗、猪口、平皿等の置き場は自ら一定して居るべきもの。凡そ家に於ける長者先覺者が常にしつかりと心得て居れば、次第に其家の傳統となり、教へずして行はるゝに至る。

元服のこと

家禮を説くに引きまどめて、冠、婚、葬、祭を一言して置かう。冠、婚、葬、祭を人の重き禮とするは、東西各國に共通である。却て我

が現代が餘り之を重く視ない。

殊に冠禮である。冠禮は社會成分たる個人が社會上平等分限を取得するの時期に於ける禮儀である。本人は其の平等分限の意識を明確にし、社會は本人に人格的責任を要むるに至るの重要時期を劃する。

我國の封建時代には元服の禮が嚴肅に在つた。其前に五歳に達すると袴着の禮があり、女子は一種の宮詣の禮もあつた。西洋では此禮は全く宗教的の形を取る。人の生るゝや直に基督教に編入され、寺院で名をつけらるゝすらも多くある。それは西も東も判らぬ嬰兒の事であるから、愈々人格的意識の發達、社會上人格の手が届いたといふ時期に達する、と信仰を確める意味のコンファイルマシオン、又はコンミニュニオン、又はアインゼ

グニングといふ名で、恰も東洋の冠禮と根本に於いて同様なる重い禮が行はるる。事は固より寺院で行はれ、此日から男子は始めて踵に届くズボン即ち袴を穿き、女子は後ろへ曳く所の長き袴を着る、それまでは子供姿で通して來たのである。我が袴着に當る事が西洋にもある。西洋の嬰兒は男の兒でもズボンは穿かず、男女同様に短い女の袴を着る、女の兒はそのまゝ冠禮まで續くが、男の兒は約三歳以上四歳になれば男の兒の半ズボン姿になる。

近頃の西洋人の服装は、丁度この子供時代に復る形が盛に行はれて居る。立派なるお嬢さんや奥さんが、頭髮をおかつばにしたり、着物は赤ン坊姿の膝まで又は腿までのつんつるてんを着用し、甚だしきは一寸だ二寸だと警視廳を心配させる。男は

それほどでもないが、獵もせぬのに獵装束、膝までの状態なものも居る。かと思へば男女風俗を入れ換へて、らつばツボンのだぶだぶで身體までがヘナヘナした紳士にも時々あてられる。これが現代のらつばかつば文明である。

士の冠禮は、本人自らが心に張りを生じ、自負自責自立の時期に入る重禮であつた。額髪ひたがみを削り落して、これまでの幾分女まがひからすつぱりと蟬脱した。然るに明治以來斷髮令が實行せられ、ざん切り頭を叩いて見れば文明開化の音がする時代となつては、頭の恰好からして元服の餘地が無くなり、重大なる人格的意義ある冠禮が消滅した。女がおかつばになり、男がオールバツクになると、愈々益々男と女との區別がこつたになり、男女混淆、男の女性化、女の男性化が隨處に行はれ、斯くして文明の

没落に向うて、東西社會は相共に急ぎつゝあるのである。

婚禮のこと

社會進化は婚禮の進化であると申しても差支ないほど、婚姻事實のある所、そこには婚禮の發達が各々相當程度に見らるる婚禮は社會成分の異性即ち男女兩者の結合によりて家の發生の基礎的事實の成立に於ける禮儀である。

我國では本來殆どなくて西洋其他に顯著なるは婚禮と祭祀との接近關係である。宗教的儀式を以て、少くとも宗教的儀式を伴うての婚禮は從來殆ど西洋各國に通じた事であつたが、近代に至つて法の上では之を必要とせなくなつた。所で我國では明治二十年代から佛前婚禮、又は神前婚禮といふ婚禮の儀式

が新たに出て来た。神前婚禮は祭神關係は殆どない。

喪禮のこと

葬禮に至つては、古今東西、宗教と關係し祭祀と接近せざるものは殆ど無い。例外は中江兆民の葬禮くらゐのものであるが、今後は追々進み行かすとは限らぬ。

社會が舊くなると、善い事も多いが、禮儀が所謂虚禮となり易い。東洋の二三社會で葬式に泣き女といふ専門技術が加はる。折角火葬し來つたる遺骨を座敷へ持つて來て、二度も三度も箸ではさんで彼方へ移し此方へ移し、丸で遺骨を玩んで焼香するがある。非常に長い數萬言の語數の御經を僧侶が讀誦する、其間何の事か判らぬながらも痺を切らしつゝ、參列者は殊勝に坐

つて居る、到頭續すかして時々息抜きに座を外づして煙草でも喫んで來るもある。宗派が舊いほど、葬家が金持ほど、この類が甚だしい。

是等の弊害に省みて近頃改良せられた葬禮に、告別式といふがある。或は住宅で、或は葬禮執行の特別建物たる齋場、又は寺院で、一切の虚禮を廢し、實質的に、死者と生者との間に於ける親交關係の結末を付ける。

西洋殊に加持力教の國々によく見る事は、葬禮行列の實に嚴肅なる事である。送葬者の服装は、黒き帽子、黒き手袋、黒きカフス釦、婦人の黒衣、黒帽、柩の後に従うて練り行く歩行振りの肅々整々、私語や左顧右眄などは藥にしたくもない。のみならず街道でこれと行違ふ通行人は、何の縁もゆかりもないのに、必ず脱

帽敬禮して静に行き過ぎる。これで始めて理想的なる葬禮といふべきである。我國殊に東京あたりの葬禮行列では、或は語り或は論じ甚だしきは嬉笑百出といふ状態。凡そ腹のしツかりせぬものは沈黙が出来ない、行儀が整はぬ、身體にすきがある。日本人は火山國だから氣早であるといふだけではない、修養が乏しい事が大原因で、心身がふらくして居るのである。葬式、行列を一目してすぐこの民族性癖が判る。「時代の尖端」とやらを行きたがるもその一種の現れである。

家祭のこと

祭祀は終りを慎み遠きを追ひ、本に報い始に反るの重き禮で、殆ど一切の禮の最も重要なものとも見らるる。

我國では、家祭は實に嚴肅に行はるる。或る意味に於いて一族の誼を温むるに重要な機會と結果とをも供する。これは族關係意識の發達並に其の深厚を加ふるに於いて、我が家族制に重要な寄與である。

此點に於いては、西洋は殆ど擧げ言ふべき成績を示して居らぬ。西洋では我が法事若くは家祭に該當するものは見受けられぬと申して宜しい。墳墓の尊尙はやゝ之を償ふが尙わが法事家祭の美制たるを没却は出来ない。

○禮儀と社會診斷

人間の氣力が薄弱になると、すべて嚴肅に氣づけるといふことが臆劫になり、禮儀が虚禮となり、次に禮儀廢止論が起る。斯

くてスペインサルの語にあるやうに、人間が野蠻未開に復歸し逆轉するのである。社會觀察の玄人にかゝると、葬式行列一つでも社會の榮枯國の盛衰が診斷される。油斷をしてはいけない。

第六 交 遊

訪問面會

人と人とお互に行き通ひ、お互に言葉を交はし、お互に交を厚うする繼續行爲が交遊である。交遊には幾多の行事が行はるる。

第一は訪問である。甲が乙を訪へるに對して、乙が甲を訪ぬることを名づけて返訪といふ。日本では割合にこれが寛であるが、西洋では必ずせねばならぬ禮儀となつて居る。かういふ點の几帳面であることが、社交を圓滑にする所以である。帯が緩んで着物の整ふことはない。

其代りに西洋では訪問の際に茶菓を饗することは殆ど無い、それは日本と大に差ふ。生活を簡易にし、生活能率の向上は考へねばならぬ。

訪問について大切なるは時間の問題である。西洋では多く面會日といふが定つて居る。何某博士は何曜の午後五時より六時まで、又役所の役人にしても、農林省何局長は月木の午後二時より四時までといふやうに定つて居る。其時刻になると、無数の訪問者が局長室の廊下に、簡素なるベンチに腰掛けて待つて居る。小使が其わきに立ちて、局長のベルの音で一人づゝ順次に呼び入れる。ほんの用談だけで、長きも五分、短きは一分位づゝで用を足して出て来る。これは佛國農商務省での講者の經驗を其まゝ。

右の面會日及び刻限は、知名の士から名もなき仕立職に至るまでを網羅せる「番地録」^{アドレスブ}といふものが西洋各國では出來て居り、それに明細に載つて居る。この「番地録」は旅館、カフェエ、俱樂部、役所、學校等には必ず備へつけてあり、用談訪問等は大概それで打合せの必要もなく容易に行はるる。用談訪問の刻限は、家庭では大抵夕食前の或る一時間になつて居る。一日の業務を大概に了へた後、暫時休息の時刻に訪問し又訪問を受けるといふ、洵に生活能率の高まる良風美俗である。我國の役所に於ける役人面會の濫雜極まるなどは、殊に恥づべき惡俗といはねばならぬ。

交遊に伴ふ第二の事項は辭令應對である。社會協同生活に於いて秩序の必要から出て来る所の態度並に行事が、一定の形式で固定せるもの、それが辭令應對となるのである。

訪問の際に先づ出て来るのが寒暄其他の挨拶で、さて座蒲團や椅子を薦める。これが皆辭令應對である。此點で尤も進んで居るのが我隣邦支那の紳士達で、割合に甚だ下手なのが我々日本人共である。西洋で日本人が擯斥せらるゝもそれが原因となつて居ることが多い。これは第一に人々の思想感情、才氣の如何により、第二に土地の風により、第三に國體により社會により上流下流により職業によつて差ふ。大學卒業前に辭令應對があまり下手では可かぬぞと學生に忠告善導する先輩のあつた時代もあつた。之を「細節拘はるに足らず」と輕視し

た豪傑書生もあつたが、中々これは細節でない、五大洲を股にかけやうといふ英雄ほど、この點に重き注意を拂ふべきものである。

勿論、人は心術が基本である。心術を淨らかにするを省みずして、單に辭令應對の技術だけに腐心するは猿芝居であるが、心術を磨くの基本の上に辭令應對に鍊達することが大切である。日本人の笑ひ、振りを、西人の皮肉屋は、メフェイス、笑ひとていやるのも、心術を裏切る、聳肩、諂笑であることがあるからである。

贈答

訪問をする側で、兎角進物が却て社交を邪魔する。この風は西洋よりも日本に多い。交遊に伴ふ第三事項たる贈答は固よ

り一種重要な交遊行事であるが、訪問と贈答とは區別して考へることが必要である。訪問は訪問であつさりと行くべく、贈答は贈答すべき理由のあるとき、節々の時に行ふべきである。贈答の楷行草を分けるなら、中元、お歳暮、お年玉などは贈答の楷である。旅行から歸つたとき、遠方の産物を大小厚薄に拘らず郷黨の知友親戚等に頒つは贈答の行であらう。珍しき品が手に入つたから、些少なから裾分けする、是等は贈答の草といふべきである。これはいづれも交遊を厚うする大切な事である。併し訪問に、又は饗宴の招きに應じて行くときに、恰も會費を持參するやうに、手土産を持參するは、餘り感心の出來ぬ一種の陋俗である。

東京邊で醫師・辯護士等の人々は、必ずしも辯護を頼むでなく

診察の御禮でもない家庭的贈り物に對しても、チャンと印刷せる受取證を出す。確實を貴ぶ文明生活上の意味がないでもないが、わが從來の仕來り、紙二枚を酬いて中たがひせぬ印とする方が優雅である。葬儀の後の忌明に、直に香典返しといふ決算式答禮は、一目に一目、一齒に一齒に似て殺風景である。田舎に於ける數代百年に亘る村落協同生活では、斯様な事はせぬ、それは永い間の相互主義が行はるゝからである。

慶 弔

香典返しの話は既に交遊の第四事項、慶弔の話に進む。慶弔は交遊の常にあらずして變である。平常の訪問贈答よりも、慶弔は殊に手落ちのないやうありたい。わが國の農村には七戸

六戸の部落から六七百戸其以上の部落まである。かゝる部落には十戸組といふがある。慶弔にはこの十戸組が鄰保協同の趣旨を極端に實行する。

若し東京を一つの部落として慶弔の鄰保協同を勵行するならば、毎日會葬だけで一生を過ごさねばなるまい。併しわが葬儀會葬の盛なるは一つの良風美俗である。唯虚禮に墮せざるの用意が肝腎である。

饗宴

交遊はあツさりせる訪問に始まつて、終に賑やかなる饗宴に至る。饗宴は會衆の一般感情を高調にし、共同行事を營み、思想の相互理解並に思想交換の繼續的機會を提供するものであり

交遊の深き且つ厚きを致すに與かつて大に力ある事である。

招待状を出して日と時刻とを定める。受けたる方では返事を出す。其日に至つて時刻を尊重せぬ、それでは無茶である。

併し其由つて來る所は、我國の時の單位が昔はひと時即ち二時間であつたからである。單位が二時間であるから一時間までは四捨五入である。何等約束違反とはならない。故に多くの地方では饗宴の折には「時分使」といふ仕來りが行はれた。客の方では約束の刻限になつても態と遠慮して「時分使」の來るのを待つて居る。帝國ホテルを會場として祝賀會があるといふ場合、式の開會は六時であつても會衆の揃ふには一時間はかゝると幹事が見込むと、わざと午後五時開會と案内狀に記し、五時半から六時までは、いりもせぬ餘興、いな前興として落語一席を催す。

それは人寄せの爲めで、會員五百人平均一人三十分の遅刻のため、延時間二百五十時間、人間一人にすれば十晝夜以上の時間を空費する。

西洋の案内状に、午後七時晚餐にお招きするとあれば、十五分前即ち六時四十五分に行くべきことを意味する。食卓はきちんと七時に開かれ、歡談笑語の間に主客打寛ろいで且飲食し且交情を温め、晚餐後は食堂から別室で更に歡談が主客又は賓客同士の間^かに交され、約そ三十分乃至一時間にして客は辭歸するが常である。さて後一週間以内に客は主人の家に禮に行く、此際は面會を求めない、併し主人方から「あがれ」と言はるれば面會して禮を述べる。但し十五分より長くならぬやうにするが禮である。我國の手土産主義が招かれたる後はそれツ切りで忘

れたやうになるよりも、少々優雅である。

曾ては我國の饗宴では、中酒の禮が行はれ、ゲーテベルグ・システムが胃腸の裡で行はれ、亂に及ぶの弊も濟はれた。獻酬も曾ては極めて節度のあるものである。西洋風では一定の順序獻立が確定し、飲も、食も、給仕が供給する以外、寸毫の手出しが出来ぬことであるから、亂に及ぶ隙間が全然ない。

第七作 法

作法の原理

圖を描くには規角ぶんかくしを畫くには矩まがひを用ふるが早道はやみちであるやうに、人間社交生活にも一定の規矩準繩に本づいて營み行くが完全であり且つ捷徑ちかみちである。これは窮屈きうくつのやうで實は甚だ餘裕じゆうよのある行き方である。家事經濟より國家財政にいたる嚴密げんみつなる豫算よさんを立てる方が却て餘裕じゆうよのある經濟が出来るも同じ道理である。社交生活に於ける規矩準繩は、汎くは禮儀、狭くは作法である。

作法も亦社會すべての事象と同じく進化する。美的進化の

眼で見れば禽獸にも亦作法がある。「鳩に三枝の禮あり」など古くから謂はれて居る。一體作法の發生は、動作に於ける最も經濟的、能率的なる行き方に在る。茶の湯の道で、柄杓へしやくの使ひ方の釜から湯を酌んで茶碗につぐ場合、釜の上から茶碗の上面までの幾何學的 shortest distance は勿論一直線である、然るに柄杓へしやくの使ひ方では之を忌んで、やゝ下の方に弧線を描く。それは、湯があれば柄杓へしやくは重い、恰も電線を柱から柱に引く場合と同様、中間が聊か垂れて居るのが自然的の姿である、これが即ち力學的 shortest distance であるからである。窮屈きうくつは茶の湯では禁物、自然でなだらかなくては可よけぬ。これが作法さくぱの發生の原理を語る一つの手近な例である。

劍道けんどう、柔術じゆうじゆつなども同一の原理から出發して極めて微妙に綿密

に應用を遂げて居る。演説家が相當の聲量を以て餘り多く疲勞せず、長い演説をする坊さんが御經を讀むに若干の節をつける、これ等は皆、茶の柄杓と同様、音聲の能率に注意するからである。近頃、府縣の技師が幾何學的、最短距離たる直線道路をつけたがり、心理學的、最近道路たる小彎曲の道路を作ることを知らぬは、反對なる缺點に陥つたもの。風を引くとマスクを蔽めるべく、強制する老婆親切、マスクは箆口訓令なりとて、マスクを搔投り棄る自由主義青年、いづれも作法の宇宙的大原理を知らざる淺薄者流である。毒瓦斯に對しては必ずマスクが要る。近頃の治安維持法の如きは、冷靜に側から聞いて居ると、恰も老人と青年とのマスク問題の喧嘩である。作法から治安維持法は随分距離があるが、原理は同一である。

平常心是れ黄土

作法は初等教育の學校並に女學校では、特設の一科目として教授せらるる。男子中等學校でも、特設はせぬが大に重きを置くべしとの規定は、我が文部當局の訓令に顯著である。然るに其實施の殆ど等閑に付せらるゝは惜むべきである。社會が進み、安定して秩序的になると、家庭や學校で作法教育が懈られても、世の中に出てから段々と作法訓練を受ける機會に乏しからぬ。それは西洋で見る例であるが、遺憾ながら我國の現状では、社會の亂雜不秩序無節制から、到底斯かる期待は容されぬ。

我國の女子は本來天成の作法家である。近來「人間頽廢」現象の一つなる、男性の女性化、女性の男性化で、男女風俗の近似・流通

混同から来る若干女子の態度動作の荒々しさを除けば、先づ我國の女子は標本的作家の資格がある。併しかゝる作家のみが現代作法論の相手ではない。社會の廣大、交通の發達から會合、集會、協會、聯合、聯盟といふやうな形で多數人が相集つて事をする機會が殖えて來た今日の時勢に於いて、男子仲間^に於ける作法の訓練が更に大に必要を増しつゝある。故に作法の教育訓練は、小學生、女學生の外に中學生、大學生に極めて力瘤が入られねばならぬ。その懈怠されてゐることが今日の所謂思想問題の重要な一因である。

凡そ作法講習は、特設科目の授業時間に限らるべきでなく、一切の場合、校の内外を問はず常に實行せられるでなければならぬ。學校當局者は、あらゆる場合に作法訓練を心掛け、あらゆる

場合にその實現を、自分も生徒も共に力行する心掛けを要する。それを久しうすれば、遂には格別の力行を須たすとも易々^{やす}と行はるるやうになる。さて常時の作法から進んで變時の作法に及ぶ、これで一わたり^の教育訓練が濟む。

禪家に於ける作法の極めて周到で極めて嚴肅なるは人の知る所である。我が永平寺の御開山、道元禪師の「清規」には、箸の上げ下し、草履の脱ぎ方、戸の開閉、あらゆる些事、微事に亘つて犯す可からざる作法が規定してある。其の書籍は上下二冊、百數十枚の漢文で書いてある。禪といへば途徹もない大法螺で人の膽を奪ふの稽古のやうにも見らるるが、大悟徹底の裏面、寧ろ根抵には、斯の如き慘憺たる細心力行、修練鍛鍊が常住不斷に行はれて居るのである。かゝる日常であればこそ、平常心^{へいぜいしん}是道^{しん}と抗

言が出来るのである。放慢邪僻なる自由主義、ニイチエ式本能満足の美的生活式日常に、何の「平常心是道」があらうぞ、そんな事では平常心是れ糞土である。

食事と食相

人の生活上、一日に必ず三たびづゝは何人も避く可からざるが食事である。食事作法の成績が食相である。これは家庭では勿論、學校でも訓練せらるる。佛國の中等學校では半寄宿セミ・インテリナとして、半寄宿料を徴集して中食を學校で供給し、それで重要なる作法訓練の機會を作ることが行はれる。英國のイートン、ローハ
一等の模範中學では全部寄宿制度を採り、進んで劍橋、牛津等の純英國式大學では、教室よりも寄宿寮、殊に一週四回の定時晚餐

會が尤も教養の重點となつて居る。そのの寄宿舎は毎學生一房を有し、一房に寢室、修學室、食堂、應接室があり、自分の房にて三四人の賓客を會して食時を攝ることが往々あるやうに出來て居る。

所謂箸の上げ下し、放飯流嚙齒決せざること、食するときには言はざること、凡そ頗る微妙なる點に亘りて物の食ひ方、飲み方、その人々に於ける特徴が食相である。食相は人品を表はし、個性を表はし、修養を表はし、門地を表はし、吉凶禍福の運命を表はす、とまで古來言はれて居る、これは相當以上に根據ある説である。

宴會の作法及開催

わが國の宴會作法は、古は極めて嚴肅であつたものが、その崩

れ、行けるは二つの方面から来た。一つは料理亭に於ける宴會から、今一つは書生の會合に於ける宴會から。料理亭では、群雄割據と玉山頽るとの二つの手續を通して作法崩壊に至つた。書生宴會は單純で、牛飲馬食、放歌亂舞、悲歌慷慨、作法の崩壊はそれに拂はるゝ價ながら、所謂浩然の氣は若干此間に養はれ、近頃流行の假裝行列やら、脂粉滿々の芝居興行やら、ダンスやらに、優ること萬々ではあるが、唯それが我國の紳士社交にまで跡を引いて、宴會作法崩壊の幾分の因由になつて居ることは争はれぬ。貴族院改革問題で四派の聯合會が芝の三線亭で行はるる。何々黨の陣容を整へる大會が上野の精養軒で行はるる。開會の挨拶、決議案朗讀、役員指名といふ工合で、一通り日程が済むと、やがて時でもない三時といふやうな時刻に食卓が開かれ、杯を

舉げて「我黨萬歳」といふ段取り。政客のみではない、一體日本人は時を論せず酒を飲まねば承知せぬといふ洵に悪い癖がある。茶なら茶であつさりやれる所を、宴會でなければ承知せぬといふは、作法の發達の幼稚から來る悪い癖である。

宴會濫用の弊は、代議士の當選祝ひ、議會報告演說、いづれにも折詰と正宗が出ぬと物足らぬ、出ぬと人が集らぬといふ所まで墮落する。これは品性の下劣なる代議士にも、乞食根性の選舉民にも多少の罪はあるが、根本は日本の社交生活の幼稚、日本社會の暗憊たる作法崩壊の地紙ぢがみの上になぐり書きせられたる下手の繪畫であるのである。

西洋風の宴會では、今の處わが國でも餘り作法崩壊を見ぬ。先づデザートに於ける長談義で、心ない能辯家が自個披露をす

る位の所。偶には菓子、果物をナプキンに包み、甚しきはナイフやフォークまで持歸る念入りの間違ひもある。これは日本風から来た間違ひである。賓客の禮儀として、喰ひ残しは始末して膳部を綺麗にすべしといふ風儀から、持歸りの風習が生れ、追と特に用意する折詰までが客に供せらるゝに至り、さてそれが洋風宴會の歸り路が物足らぬといふ風にまで導いた。間違ひの來歴はこれである。

登會、茶話會、夜會

會合には一定の事務目的のあるとないがある。ないのが所謂懇親會で、その尤も濃厚なのが晩餐會、次が午餐會、次が茶話會である。

茶話會は、西洋では主に午後四時、早きは三時又は三時半より、晚くも四時半、最も晚くて五時に至つて止む。たとへ一定の事務目的がないにしても、靜肅に、和氣靄々としてその任務を達せんが爲には、會衆に於ける相當の作法訓練を條件とする。

此外に夜會がある、これは夜の茶話會で、尤も數々舞踏を加味する。凡そ夜會や茶話會では、會衆の十分一にも満たぬ椅子が具へられてあるだけで、これは立ち疲れた者が暫時の間休息する爲にのみ備へたもの、一般會衆は立つのが原則である。立つて居れば會衆同士の移動性、充分で、例へば五百人の會衆であつても、二時間にして其中二三百人とも話せる。我國で、宮中三大節の御召宴に、正午十二時に豊明殿に出御を迎へ奉り、盛饌を頂戴すべく罷出る其前に、約三四十分は東の溜の間等に參集し

る位の所。偶には菓子、果物をナブキンに包み、甚しきはナイフやフォークまで持歸る念入りの間違ひもある。これは日本風から来た間違ひである。賓客の禮儀として、喰ひ残しは始末して膳部を綺麗にすべしといふ風儀から、持歸りの風習が生れ、追と特に用意する折詰までが客に供せらるゝに至り、さてそれが洋風宴會の歸り路が物足らぬといふ風にまで導いた。間違ひの來歴はこれである。

餐會、茶話會、夜會

會合には一定の事務目的のあるとないがある。ないのが所謂懇親會で、その尤も濃厚なのが晚餐會、次が午餐會、次が茶話會である。

茶話會は、西洋では主に午後四時、早きは三時又は三時半より、晚くも四時半、最も晚くて五時に至つて止む。たとへ一定の事務目的がないにしても、靜肅に、和氣靄々としてその任務を達せんが爲には、會衆に於ける相當の作法訓練を條件とする。

此外に夜會がある、これは夜の茶話會で、尤も數々舞踏を加味する。凡そ夜會や茶話會では、會衆の十分一にも満たぬ椅子が具へられてあるだけで、これは立ち疲れた者が暫時の間休息する爲にのみ備へたもの、一般會衆は立つのが原則である。立つて居れば會衆同士の移動性、が充分で、例へば五百人の會衆であつても、二時間にして其中二三百人とも話せる。我國で、宮中三大節の御召宴に、正午十二時に豊明殿に出御を迎へ奉り、盛饌を頂戴すべく罷出る其前に、約三四十分は東の溜の間等に參集し

て控えて居る、控えて居るとはいへど實は立つて居るので、其間に文武百官が彼方に歩き、此方に歩き、色々談話を交す、是が丁度西洋の夜會に於ける情勢である。然るに我國で夜會や茶話會を催すと、會衆達は必ずどツかと椅子に腰を下さなければ、承知しない、その結果、向ふ三軒兩隣との外は話が出来ぬ、會期三時間でも話す人は數人に止まり、如何にも會合の能率が低い。これは從來の疊の上の會合の癖が抜けきらぬ爲で、何も日本人が馬鹿で西洋人が伶俐な爲ではなく、況や和服の爲などでは毫頭ない。故に作法の訓練に於いて聊か注意すれば容易に垢抜けが出来る。

茶話會で日本人は斯様に四方に群雄割據をする、封建式茶話會が至當の名稱であらう。然るに不思議にも宴會になると日

本人は移動式に轉化する、郡縣式午餐會、晚餐會をやる。西洋式の食事をする會では、各々與へられたる椅子に倚りツ切りで、それも卓子との距離さへも制限せられる。和洋正に相反對である。西洋風の會でも日本人は相互に献酬をする、それは作法の日蝕である。田舎、都會の洋食店で大數の會合があると、或は違仕立のボーイを加へ、或は藝妓を以てボーイの補欠をする、それが又右の日蝕の一因となる。

西洋風の宴會では、何分にも會衆が時として數百數千に及ぶことがあるから、假令數十人の宴會でも必ず座長を設ける。座長が一々注意を與へなくとも一般の極りがある、即ち宴會作法が既に一定の俗を成して居ると、挨拶は所謂デザート直後に交換せられ、重要賓客の爲に健康を祝するならば、必ず座長の發

聲を待つて、其の發聲、少くとも其の指導の下に行はれ、會衆の一人が卒爾として頓狂聲で萬歳を唱ふるなどは絶対にない。凡べてこんな事のあるのは和洋兩式の調和が全からぬからの錯亂である。

會合の作法は、一時間も話をすれば充分であるから、學校ならば高等小學や中學あたりで一通り授けて置くべきである。

作法の基礎教育

作法の基礎教育として、昔から茶の湯が行はれた。茶の湯で起居動作を鍊るは、恰も俳優が舞踊で演劇の基礎教育を受くると同様である。

尙、男性の作法教育には武藝がある。弓道、劍道、騎射、いづれも

此方面に重要であつた。更に謡曲、劍舞なども、作法の具體資料を供給する科目であつた。

然るに今日の中等教育、高等教育には、殆ど何等之に該當するものがない。そこで作法訓練が前途遼遠となる。西洋では、第一に少年男女は元服を済まさぬうちは全然子供扱ひで、本人も充分それに満足し、身の程をよく知つて實に從順、溫順である。孔子の擯斥する「闕黨の童子」の風は毛筋ほどもなく、先づ以て作法の消極的教育、素地はこれで充分に出來て居る。さてその上に積極的教育のおもなる資料と機會とを供するのが所謂「シエテ」で、そのおもなるが夜會であり舞踏である、これで身のこなしから、人をあしらふ具體的作法を練習する。控え座敷から食堂に入る折、必ず男子が婦人客の誰かを肱を組んで案内するの

名譽なる義務を負ふ、こんな時の身のこなしは全く舞踏からの成績である。

茶道の外に香道がある。更に娛樂の性質を多分に混有するものに貝合せ、雙六、加留多遊びなどがある。華道は一種の特色を有し、複雑なる性質を帯び来るが、作法の問題との關聯は稍々淺い。

凡そ美術には四類ある。造型美術が其一で、彫刻、書畫、建築、印刷、鏤刻を包含する。表現美術が其二で、小説、戯曲、詩歌、文章を包含する。演奏美術が其三で、音樂、舞踊、演劇、樂劇を包含する。享趣美術が其四で、華道、料理、香道、更に舞踏を包含する。茶道の享趣美術に於けるは、恰も樂劇の演奏美術に於ける、建築の造型美術に於けるが如く、諸般のやゝ單純なるものを集めて其上に冠

する所の複雑高尚なる美術である。而して作法の根抵修養機關たるの性質がそこに生じて來るのである。

汽車作法

交通の盛に開けたる今日にては、新たに汽車作法といふ一項が設けられねばならぬ。汽車は實に現代が齎らせる重大なる社交生活作法の舞臺である。汽車は往々長時間に亘つて既知又は未知の人々と同室生活の營みとなる、何等豫め計畫することなくして、所謂袖觸れ合ふも他生の縁といふ關係を生ずる。舊幕時代までは、淀川の三十石船、東海道宮の七里の渡しといふ位の外、何等これに該當するものがなかつた。殊に中流以上の人士は、多くは船を買切りにしたから、社交關係の價値は更に大

に滅殺せられた。

見ず識らずの道連れに對して、沸然として無愛想で居るべきか、又は馴々しく言葉を掛けるべきか、此點が先づ第一の問題になる。英國の紳士淑女は、自分は何某でござる、と見ず識らずの人に物を言ひかけるすら既に失禮として居る。先づこれが原則である。我國でも大體これであつた。併し或る機會には是非とも言葉を發せねばならぬ場合が出て來る、其場合は唯兩人共通の問題解決の爲にする協同動作の爲に要する言語交換であるから、必ずしも名乗りあふには及ばぬ。

さて次は起居動作の問題であるが、實に日本の汽車内の作法生活は亂雜を極めて居る。乗客の無作法の爲に、室内は忽にして密柑、林檎、バナナの皮等が、唾壺として備へ付られて居る器物

の上に、積んで山を成すのみならず、往々牀の上に撒き散らされる。近頃は九呎四吋四分三の廣軌にも劣らざる大型ボギー車が運轉されるにも拘らず、未だ喫煙車、禁煙車、婦人車の設けがない。爲に室内の汚れは喫煙からも大に促される。灰を飛ばし、煙と汚氣とを吐いて隣りの客に無禮をし、甚だしきは他人の衣服に焼け穴を拵へる。煙客の汚穢無作法は酒客のそれよりも不斷であるだけ罪が深い。尤も日本の汽車酒客は、随分時でもない時に澤庵を肴に熟柿を吹く。寝ると食ふとで汽車時間をつぶす外に術のない婦人客、男子客も數多いから、あながち煙客と酒客とのみを責むるにも當らぬ。

日本人は下駄や靴を穿きさへすれば、屋外と心得、屋外即ち室内以外でさへあれば如何に散らかしてもよいと心得て居る。

公園然り、汽車然り。即ち彼等には汽車の室内はあけつ場である。肥塚である。それが日本汽車客室の亂雜極まりなき事態の心理的本原である。靴に泥がついて居ても恥ぢぬ、それは靴を足駄と心得るからである。小學生徒に靴の手入れを毎日懈らす、黒く光るやう躡るならば、それが汽車作法改良の第一歩ともならう。

近頃新聞の傳ふるやう、鐵道省は旅客優遇の趣旨とやらで、馴れた犬なら客室に連れこむことを許すといふ規則改正をするとの事。犬は主人には馴れても他人には馴れぬ。犬を座敷に入れるほどまだ日本人は墮落して居らぬ。西洋でさへ守門の犬と老嬢等の座敷犬との間には蓄犬税金の割合が一と五以上とほど差ふ。さらでだに下駄を穿く處として汽車の客室をあ

けつ場と心得る、日本人は、犬でも入れたら愈々益々客室を臺なしにするであらう。殊に旅客が辨當をつかふ時の、犬の部屋中鼻を鳴らして嗅きまはる醜態が、今から想ひやられる。愈々日本人は、犬と、同格だわい。

食堂車の設營は相當に届いて居る。然るに食堂車内の無作法に至つては更に心外千萬である。着帽のまゝなるあり、外套着用のまゝなるあり、食卓即ち膳の上に兩腕を突く者あり、食堂經營者から見ても蓋し心外であらう。三等客が食堂車に入るを制限すべき理由はない、併し其所持する切符の白、青、赤、色の以何に拘らず、食堂に入つたら食堂作法を氣付けねばならぬ。青の客とてバナナの皮で相客を滑り轉ばすに巧なることは赤客に譲らぬ、或はそれ以上かも知れぬ。

凡て右の如き狼籍行爲は、何も日本人の品が悪いからではない。これ亦正に過去の歴史的遺習の結果である。下駄穿きのまゝ這入れる食堂をば、繩暖簾をくゞつて空き樽に腰かける居酒屋と心得僅にとびろくがビールに代つただけといふが、日本人の食堂に於ける無作法心理の偽らざる告白であるのである。されば尋常五年六年の兒童にでも、その考の謬れる點を説き聞かせるなら、直に明日から改良の出来る事である。

汽車の寢臺利用についても言ふべき事があるが、これは設備に關することが多いからこゝには略し、曾て婦人が客室内に人の前で理髪を始め、又二人の婦人が更衣をするを觀せられた。理髪は車掌之を默過し、更衣は流石に之に注意を與へた。外國婦人が大なる犬を連れ込んだに對し、他の乗客の再三の注意で

漸う車掌は注意を與へた、此婦人はいつかな注意に應せず、再三にして漸う犬は室外に連れ出された。明白に掲げてある鐵道規則の違反さへ手數のかゝる外、婦手數をかける日本の鐵道ではある。

道 路 作 法

道路交通は、殊に東京大阪の如き大都市に於いて頻繁となつた今日、道路作法が勵行されねば、人々は不測の害を被ることになる。

道路作法の第一は歩行作法である。西洋人は立つことが上手で、大の男が歩行するにも三尺幅のサイドウオークで結構行き違ふ。日本人は勸進帳の辨慶引つ込みの飛び六法宜しくで、

一高の豪傑君等が來ると喜多床の前二間幅が一ばいになる。これも舊幕時代の社袴が肩の所を左右に七八寸廣くして、威嚴を服装で拵えた苦辛の遺物である。今日でも海軍正装のエポレット、陸軍軍服の肩章次第に軽いながら同一の意義からの服装である。關東武士の落し差し、九州武士の何々差しで、武士が兩人道路で行き違ふと、兎角刀のこじりが鞘當てをすゑ、どうか今日の道路に、封建式堂々振りの歩行は、御遠慮ありたい。

第二は乗物作法である。これは乗り手よりも乗せ手の責任が大である。一に自動車、二にオートバイ、三に電車、四に人力車、さて五つには荷車。この中で人力車は今年で六十三年、洗煉に洗煉を重ねて居るが上に、此兩三年、東京大阪あたりではめつきり減つたから言ふ事はない。自動車以下は改めて欲しい弊が

中々多い。東京市民の二百餘萬が金を出して道路を拵える。それを一萬何千の自動車が我物顔に荒らし行くのみならず、二百餘萬の人間共は、泥を掛けられながら怨めしそに見送る。自動車作法はもう少し嚴肅で然るべきであらう。オートバイは乗り手には輕快かも知れぬが、文明の屑といふべき代物である。併しこれ等は皆、車の人のみでなく、車と徒歩者との協調を以て解決せられねばならぬ。

巴里には道幅の廣い大道には、飛石のやうに幾ヶ所にも道を横ざる爲の小島が設けられてある。命掛けの道路にならぬやう、この點も我國で更に注意ありたい。十字路に於ける「進め」「止め」の信號や、交通巡查の勤勉や、警視廳は隨分骨を折つて居る。巴里のオペラの前などは、全く自動車で身動きがならぬ、それに

比べると東京の銀座四丁目でも沙漠のやうなもの、それで交通
 巡査が汗水きり、聲を囁らす。わが同胞の道路作法は、今後一層
 の訓練を必要とする。

演藝會作法

音樂に對する喝采の作法が我國では甚だ亂雜である。器樂
 には滅多に例はないが、聲樂、西洋風の獨唱、日本の義太夫、其他矢
 張一種の聲樂として演劇に於ける面白き臺詞、すべて此の如き
 場合に拍手をするは、恰も味方の登壇辯士に對する反對黨の彌
 次に對して、此方も騒然たる彌次り返しをやつて應援するの類
 で、丸で最負の引き倒しであり、また藝術の打壞しである。音樂
 の妙所々々に對しては、西洋人は極めて低聲にブラヴオー／＼

といふ、是は音樂が心魂に徹せるときに覺えず出る感歎の發音
 である。

美妙なる一曲が了つて藝術家が其壇を退く其際に於ける拍
 手は、固より適當なる敬意の表象であり、何等差支ない。其拍手
 が容易に收まりそうもなく繼續するに於いては、一旦樂屋に引
 込んだ藝術家が再び出て來て、熱烈なる喝采に對して謝意を表
 し、満足の様子を見せる、それが此場合の作法である。右の「再び」
 を佛蘭西語で「アンコーア」といふ、近頃我國でもその眞似事が流
 行る。

第八 結 び

文政當局の作法尊重

本篇も最早所定の紙數が盡くるに垂たんとくとして居る。仍て茲に一二の言ひ漏らしたことを共を書き添へて、結びの言葉に代へやう。

文部省の修身教育基本法令は、明治三十三年八月二十日勅令第三百四十四號小學校令、同年同月二十一日文部省令第十四號小學校令施行規則、明治三十二年二月七日勅令第二十八號中學校令、明治三十四年三月五日文部省令第三號中學校令施行規則、明治四十四年七月三十一日文部省訓令第十五號中學校教授要

目、明治三十二年二月七日勅令第三十一號高等女學校令、明治三十四年三月二十二日文部省令第四號高等女學校令施行規則、明治四十四年七月二十九日文部省訓令第十二號高等女學校及實科高等女學校教授要目、明治三十年十月九日勅令第三百四十六號師範教育令、明治四十年四月十七日文部省令第十二號師範學校規程、大正十四年四月十八日文部省訓令第七號師範學校教授要目に顯然として明確である。

右の中、作法の教授訓練については、小學教育に在りては勿論之を重視する。中學教育に在りては、第一、第二、第三、第四、第五の全學年を通して修身科の要項として之を重視し、且、作法ヲ教授スルニハ、克ク其ノ精神ノ存スル所ヲ知ラシメ應用宜シキヲ得シメンコトヲ要ス但シ之ヲ授クルニハ、特ニ時間ヲ設ケス他ノ

修身教授ニ於テ便宜併セ課スルモ可ナリ」と注意を與へて居る。高等女學校に在りては、全學年を通じて修身科を毎週二時とし殊に作法を重く課することになつて居る。師範學校に在りては、第一、第二、兩學年の修身科に作法を課する。

女子教育に於いて作法を課するは、何人も思ひ及ぶ所、また何人も女學校の設備に觀て承知して居る所であるが、男子中學教育並に師範教育に於いて、文部當局が斯程までに作法教育に力瘤を入れて居ることは、世人の或は多く知らざる所である。教育當事者も、況て中等教育の青年少年も、此點に於いては、親の心子知らずではないか。學問の道は他なし、其の放心を求むるのみとやら古聖も教へて居る。今の青年學生が何も素質が悪いのでない。「思想國難」など、矢鱈に國難呼はりするものが神經衰

弱に罹つて居る。併し青年學生の精神は弛んで居る、思想は放漫に流れて居る、放漫なれば横流する、横流すれば邪僻にも這入る。この放心を收束するの工夫が大切である。そこへ作法の大切さがある。

又々勅語大失念

師範學校第三學年の修身科要目には、特に「國際生活」といふ一項が加へられ、其目として「國際親善、國際協力、外國人ニ對スル禮儀、交際」といふが記載されて居る。これはまた何たる事か。

「國際親善、國際協力」は先づ麥酒の氣の抜けたやうな、無害なる代物として暫く措く。今日「國際生活」を修身科にて教授する場合、何よりも大切なるは、戦争平和である。師範學校を卒へたる

一人前の國民教育者が、戦争の善悪得失について明確なる識見を有せぬやうで、一國の軍事外交がどうなると思ふか。「平和を欲する」などは教へずとも事。國際親善とは何を教へる積りか。國際協力などは雨が降り風が吹くと同様の自然的事實である。何も教へることはない。特に修身科の教育に入るの價値がない。教ふべきは戦争の道德的價値である。これこそは少くとも十乃至二十時間を要して教ふるを要する重要事である。戦争は止むか止まぬか、戦争は止めねばならぬか止めずともよいか、戦争の進化すること、戦争の進化は如何なる相^{すがた}を取り如何なる事項に亘るか、軍備の價値條件如何、兵役の道德的根據如何。凡そ此の如きが「國際生活」といふ項の中、戦争といふ目を設けて是非共教へられねばならぬ修身要目であるのである。

殊に滑稽なるは「外國人ニ對スル禮儀交際」といふ目である。「外國人ニ對スル禮儀」などいふものが何處に在る？ 内國同胞に對する禮儀の外に、何が特に外國人様に對し奉るの禮儀だといふのだ？ 明治二十三年十月三十日の勅語に「恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ」と仰せられ、更に「之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と仰せられてある。恭儉己れを持ち博愛衆に及ぼしさへすれば内國人に對しても外國人に對しても交際の道はそれで十二分に完全である。何をことさらに「外國人ニ對スル禮儀だ」「交際だ」？ こんな事を聞かされると、滑稽を通り越して涙がとめどもなく出て来るわい！

今の日本人が外國人をさへ見れば石でも投げることでも思うての沙汰か。社會の實狀に對して何故そんなに目を蔽ふか。

それとも自分の頭が舊くて今尙七八十年前、高輪東禪寺や生麥の夢におびえてうなされて居るのか。日本人も何時までも印度人でもあるまい。印度では王様でも汽車は二等車以上に乘れぬ、一等は「外人」だけの乗る所である。併し印度人支那人の方が所謂日本人よりも餘程お先に覺醒して居るぞよ。

女學校の寄宿舎

師範教育の女子の部には「注意」として、女生徒ニ對シテハ前ニ掲ケタル道德ノ要領ヲ授クルノ外更ニ女子ニ必要ナル諸徳ヲ養フコトニ注意スヘシとある。これは洵に適切なる注意書きである。

それについて憶ひ起すは女學校、女子師範學校の寄宿舎であ

る。佛國巴里の州立女子師範學校は、巴里の中北部のバチニヨル街に在る。その寄宿舎では、復習室は放課後の教室之に充てられ、食堂は勿論別にあり、寢室は一つの大きな部屋を、一人一個の小區劃に仕切り、縦横いづれも二米^{メートル}之を仕切る圍ひは高さ二米の木材木板で、天井はがら明き、入口は一米の厚い濃綠色の暖簾^{れん}で、各區劃には寢室一個、はんどに鏡、椅子一個が備へつけてある。一つの大きな部屋に六人乃至十二人が暮らすやう出來て居る我國の女學生寄宿舎と、どちらが女子ニ必要ナル諸徳ヲ養フに注意が加へられて居るかは、一寸一考する位の價値はあらう。

食相の事は前に聊か説いたが、寢相についても一言の要があるらう。

寢る、眠つてしまへば自意識はない、寢たるすがたまでは本人に責任がない、と言ひたい所であるが、さてそうは行かぬ。

人は平生の心掛けが大切である。「生酔ひ本性違はず」で、却て人の眞價は不用意の時に、處に、流露するものである。不用意の極は眠りに落ちた時に在る。平生心身の修まりの出来て居る人は、寢相が崩れぬ。平生精神の放慢なる人は必ず寢相が滅茶々々になる。武士は風の音にも眼が覺めるといふは、平生の精神充實が四六時中睡眠の時に常住して居るからである。その癖、斯様に浩然の氣を養ひ得たる人々は、心廣く體胖で、十分に安眠熟睡して居るのである。自ら反り省て疚しき人々は夜も

安眠が出来ずして悪夢に襲はれ、不眠症に陥り、甚だしきは佐倉の殿様のやうに幽霊を製造し、抜刀であばれまはる。その軽度の症候が寢相の崩れである。

人は寢相の好いことを心掛けねばならぬ。これまでお話しした諸々の作法は人に對する作法共であつた。寢相は天に對する作法である。寢相は人が已れを虚うしての作法である、人を相手とせず、唯天のみを相手とする作法である。天に對する作法に相當の造詣があるやうになれば、先づ一人前というてよい。

爾の下駄を穿き且歩め

作法と、思想、禮儀と、人格。平常心、是道、脚下を照顧すべし。

空論の時代は既に遙かの過去である。わが文政當局が夙に掲

げたる作法尊重の法令を反古にせずして、教師も生徒も一段の
精進、自彊不息を要する。思想國難は畢竟痴人の悪夢である。

(了)

爾下の駄を穿き且歩め

建部遷吾著述目錄

普通社會學

第一卷 社會學序說

菊判四〇〇頁 明治三十七年

金港堂

第二卷 社會理學

菊判四七〇頁 明治三十八年

第三卷 社會靜學

菊判五七〇頁 明治四十二年

第四卷 社會動學

菊判六六〇頁 大正七年

理論社會學綱領

菊判一五〇頁 明治三十七年 金港堂

賜天覽 社會學的研究 戰爭論

菊判四〇〇頁 明治三十九年 金港堂

水城自彊錄

陸象山

菊判二六〇頁 明治三十年 哲學書院

哲學大觀

菊判四〇〇頁 明治三十一年 金港堂

西游漫筆
外政時言
經世時言
靜觀餘錄
新興國の青年
日本は赤化するか

菊判四三〇頁 明治三十五年 哲學書院
菊判一〇〇頁 明治三十六年 有朋館
菊判六六〇頁 明治三十九年 同文館
菊判五六〇頁 明治四十年 文淵堂
四六判六一〇頁 大正四年 莫哀社
四六判六〇頁 太正十二年 新日本協會

賜天覽 戊申詔書衍義

菊判二一〇頁 明治三十九年 同文館
縮刷小判二八〇頁

賜天覽 世界列國の大勢

菊判九〇〇頁 大正元年 同文館

賜天覽 日本帝國の國是

三六判一〇〇頁 大正三年 自刊

教育行政研究

菊判九九〇頁 大正三年 金港堂

宗教に對する實理政策

菊判一五〇頁 大正三年 日本社會學院

增補 世界列國の大勢

三六判二七〇頁 大正三年 同文館

社會學と教育

四六判二二〇頁 大正四年 育英書院

都會生活と村落生活

小判二三〇頁 大正四年 通俗大學會

國語に對する實理政策

菊判一五〇頁 大正七年 日本社會學院

賜天覽 國體國是及現時の思想問題

菊判一〇五〇頁 大正九年 弘道館

賜天覽 現代社會文明

四六判三四〇頁 大正九年 冬夏社

賜天覽 教育勅語新衍義

菊判一三二〇頁 大正十年 同文館

社會實理 國家社會觀

菊判二六〇頁 大正十年 同文館

政治改革

四六判三〇〇頁 大正十年 冬夏社

平和か戦争か	四六判三〇〇頁	大正十一年	日本學術普及會
現代文明と思想批判	四六判五一〇頁	大正十二年	同文館
賜天覽 國本涵養 民心振作	癸亥詔書衍義	四六判二六〇頁	大正十三年 同文館
食糧問題	四六判三三〇頁	大正十四年	同文館
社交生活と社會整理	四六判四三〇頁	大正十五年	新日本社
賜天覽	宗教問題附神社行政	四六判四〇〇頁	昭和二年 同文館
應用社會學十講	賜天覽	四六判二五〇頁	昭和二年 同文館
皇基國體と社會整理	(共產黨事件の徹底的對策)	菊判三三〇頁	昭和二年 弘道館
作法と人格教育		四六判一八〇頁	昭和六年 丁酉出版社

昭和六年九月十五日印刷
昭和六年九月二十日發行

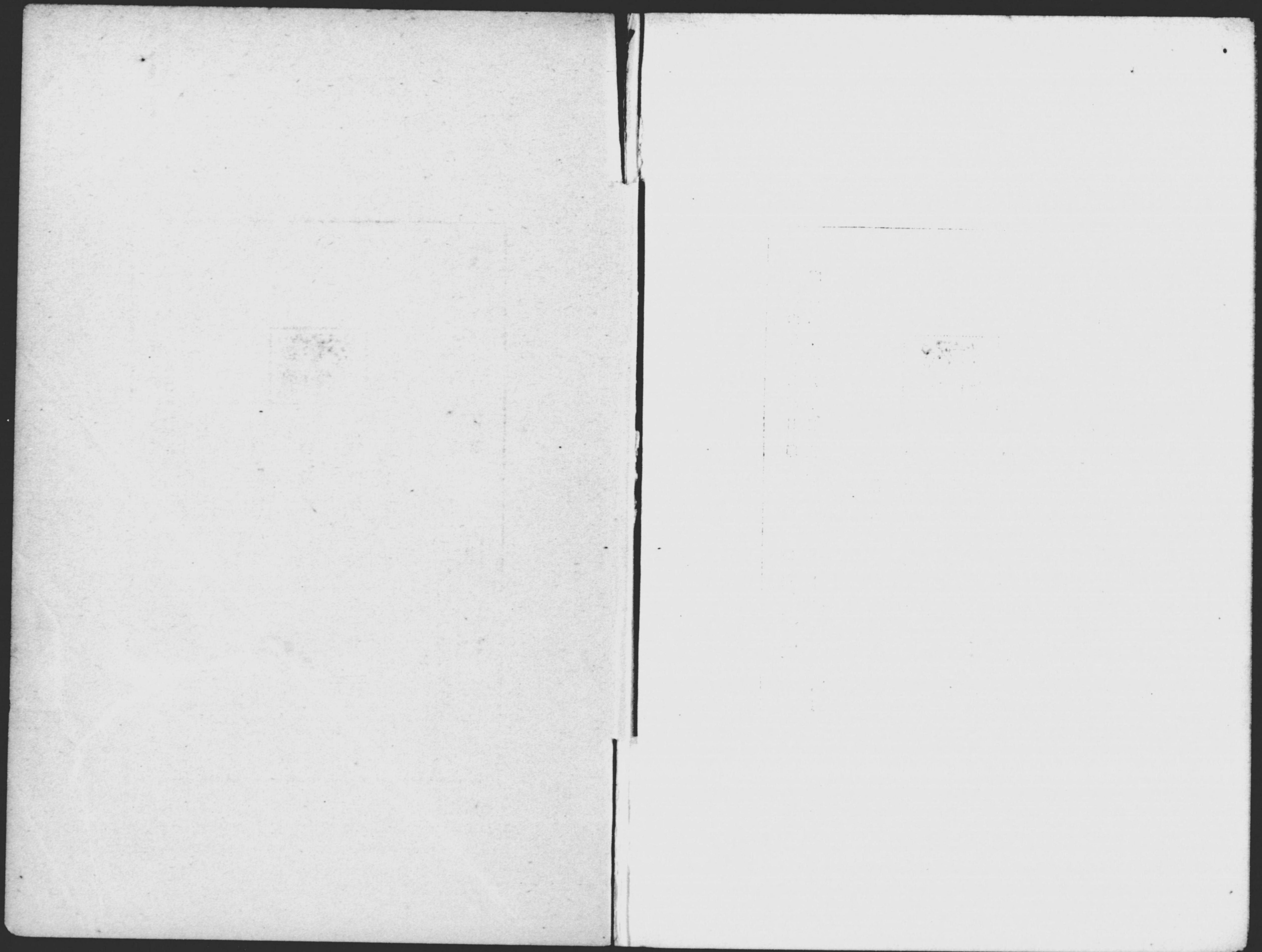
作法と人格教育
定價金 七拾五錢



著者 建部 遜吾
 發行者 紙本 治一郎
 印刷者 森江 有三
 印刷所 株式會社 豐文社
東京市神田區北神保町八番地
 東京市外北品川宿小關五六四
 東京市外北品川宿小關五六四

發兌 東京市神田區北神保町八番地
 電話九段七九二番 櫻井口應東京三六〇〇番
 東京市神田區安神保町二番地
 電話六四七・二八九番 櫻井東京四二八一〇番

栗田書店 丁酉出版社



275
78

